石川県埋蔵文化財情報

第　36　号

巻頭図版（柳田猫ノ目遺跡他3遺跡、八日市地方遺跡）

平成27年度下半期の発掘調査から …… 所長　福島正実…… (1)

発掘調査略報

中カワナミマエダ遺跡（輪島市） …… (4)

柳田猫ノ目遺跡他3遺跡（羽咋市） …… (6)

宇気ボウマワリ遺跡（かほく市） …… (8)

福久遺跡（金沢市） …… (10)

新庄カキノキダ遺跡（野々市市） …… (11)

金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）（金沢市） …… (12)

末松信濃館跡（野々市市） …… (14)

小川B遺跡（白山市） …… (15)

一針C遺跡（小松市） …… (16)

八日市地方遺跡（小松市） …… (20)

庄・西島遺跡、津波倉廃寺（加賀市） …… (24)

平成27年度下半期の出土品整理作業 …… (26)

調査研究・報告

弥生時代における土器の移動について …… 久田正弘…… (29)

2016年10月

公益財団法人　石川県埋蔵文化財センター

写真解説

柳田猫ノ目遺跡他３遺跡（柳田シャコデ遺跡、柳田台地遺跡、寺家遺跡）

調査地の遠景（柳田シャコデ遺跡、柳田台地遺跡方向から寺家遺跡方向へ）

今回の調査は、「のと里山海道」の道路拡幅に伴う橋脚建設部分や確認調査など、狭い範囲の調査区を複数対象とする調査であったが、寺家遺跡の北側に隣接する柳田猫ノ目遺跡、柳田シャコデ遺跡、柳田台地遺跡も含め、弥生時代から中世の集落域や水田などの生産域が、砂丘に堆積した土砂や洪水砂等の堆積を挟みながら、遺構面が重複（最大４面）している状況を確認した。集落域では、掘立柱建物や井戸、土坑などを検出し、弥生土器や土師器、須恵器、陶磁器などが出土した。また、生産域では、水路や畦状遺構、畝溝状遺構などを検出した。

寺家遺跡（国史跡隣接地で検出された中世の土塁と側溝）

羽咋市寺家遺跡は、昭和53年に能登有料道路（現在の「のと里山海道」）建設に関わる工事の際に発見された、海岸砂丘に埋もれた奈良・平安時代を中心とする遺跡である。その後の発掘調査により古代の祭祀の跡や、関連する施設、使用された祭祀遺物が多数発見され、「渚の正倉院」とも呼ばれており、平成24年１月に国の史跡に指定された。過去の調査でも１辺が50m以上の方形区画を持つ土塁状遺構が複数確認されているが、今回史跡指定地の東側地点で検出された、直線状に延びる中世の土塁と側溝は、新たな方形区画の一部に当たると考えられる。遺跡の変遷を考える上でも貴重な発見となることから、隣接地の史跡と合わせ現地で保存できるよう、調整中である。

調査地の遠景（柳田シャコデ遺跡、柳田台地遺跡方向から寺家遺跡方向へ）

寺家遺跡（国史跡隣接地で検出された中世の土塁と側溝）

写真解説

八日市地方遺跡

環濠１・２（西から）

八日市地方遺跡は、JR 小松駅の東側一帯にひろがる北陸を代表する弥生時代中期の大規模環濠集落で、周囲に平坦な沖積低地が展開する水上交通の要衝に位置する。北陸新幹線建設に係る平成 27 年度調査区は、遺跡の北西部に位置しており、多重に巡らされた大きな溝（環濠）の内側に平地建物や掘立柱建物、方形周溝墓などが密集する状況を確認できた。

管玉、管玉未成品と緑色凝灰岩の原石

今回の調査区からは、過去の発掘調査と同様に多数の土器、石器などが出土した。なかでも、緑色凝灰岩を使用した管玉の製作関連資料は充実しており、管玉の完成品、製作途中の分割品、原石だけでなく、素材を擦り切って分割する道具（石鋸）、砥石、管玉に孔をあける石針などの製作工具も多数出土している。

環濠1・2

管玉、管玉未成品と緑色凝灰岩の原石

平成 27 年度の発掘調査から

所　長　　福島　正実

1　はじめに

公益財団法人石川県埋蔵文化財センターは、平成 27 年度に石川県教育委員会から 19 件の発掘調査を受託した。関係機関ごとの件数は、国土交通省が 5 件、鉄道運輸機構 2 件（うち 1 件は準備作業）、県環境部 1 件、県土木部 11 件であった。本号では平成 27 年度に当法人が実施した発掘調査のうち、本誌第 35 号で紹介した 7 件以外の概要を紹介する。また、石川県金沢城調査研究所および県内市町等が実施した主な発掘調査の概要も紹介する。

2　（公財）石川県埋蔵文化財センターが実施した調査

中カワナミマエダ遺跡（輪島市）は中山間地域の小平地に立地する集落跡であり、古代の掘立柱建物、板塀、中世の掘立柱建物、室状遺構等を確認し、縄文、古墳時代の遺物も出土した。

柳田猫ノ目遺跡、柳田シャコデ遺跡、柳田台地遺跡、寺家遺跡（羽咋市）では複数の遺構面が見られ、掘立柱建物、井戸、土坑、畦状遺構、畝溝、溝等を確認し、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、木製品、石製品、金属製品等の遺物が多く出土した。寺家遺跡の史跡指定地に隣接する調査区域では中世の土塁を確認した。

宇気ボウマワリ遺跡（かほく市）では古墳時代の竪穴建物、平安時代の掘立柱建物、中世の溝等を確認、平安時代の土師器埋納小穴も検出した。

福久遺跡（金沢市）は旧河北潟縁辺の低地部に立地する奈良・平安時代の集落跡である。縁辺部と考えられる区域の調査で、奈良・平安時代の掘立柱建物、土坑、用排水路等を確認した。金沢城下町遺跡（東兼六町 5 番地区）は曹洞宗寺院の旧墓地であり、江戸時代の土葬墓が密集し、木棺墓や越前焼大甕の甕棺を多数確認、棺内から豊富な副葬品や人骨が出土した。

新庄カキノキダ遺跡（野々市市）縄文時代晩期、弥生時代後期、平安時代後期の集落跡であり、弥生時代の大型竪穴建物内で貯蔵穴を確認した。

小川 B 遺跡（白山市）は弥生時代後期の集落跡で、川に挟まれた微高地上で土坑、溝を確認した。

一針 C 遺跡（小松市）は弥生時代から近世の集落跡で、上層面では古墳時代後期から中世の、下層面では弥生時代中期から古墳時代前期の集落域および墓域を確認した。遺構、遺物とも多数出土し、古墳時代の緑色凝灰岩製合子、平安時代の軒平瓦等が出土した。八日市地方遺跡は弥生時代中期および中世の集落跡で、弥生時代では平地建物、方形周溝墓等を取り囲む複数の環濠を確認し、玉作関連遺物の他、線刻のある砥石が出土した。

庄・西島遺跡、津波倉廃寺（加賀市）では、東側の調査区域で弥生～古墳時代の掘立柱建物、土坑、井戸を確認し、西側の調査区域で古代の掘立柱建物、土坑、井戸等を確認した。古代の瓦片は出土したが、寺院に関連する遺構は確認されなかった。

なお、北吉田ノシロタ遺跡（志賀町）、酒井バンドウマエ遺跡（羽咋市）、杉瀬ニシウラ B 遺跡（津幡町）、二日市イシバチ遺跡、三日市 A 遺跡（以上野々市市）、漆町遺跡、矢田新遺跡（以上小松市）、加茂ボケ生水ウラ遺跡（加賀市）の本年度調査の概要については本誌第 35 号を参照されたい。

3　石川県金沢城調査研究所が実施した調査

鼠多門・鼠多門橋復元整備の基礎資料を得るための確認調査が行われ、中央大柱礎石や切石積の側壁石垣の残存状況等が明らかにされた。

4　市町が実施した主な調査

珠洲市は法住寺墓地で火葬墓３基を確認し、珠洲焼陶片、経石、銭貨が出土した。

能登町は真脇遺跡（国史跡）の第二期史跡整備に向けた確認調査を継続しており、河道から木製遺物が多数が出土した。また松波城跡の確認調査で掘立柱建物、礎石建物、柵列が確認され、珠洲焼、土師器が出土した。

七尾市は４件の調査を行った。白浜ゴリゴ遺跡では浜辺に滞留したものと考えられる縄文土器片、土師器片、石製品、製塩土器、木製品等遺物が多量に出土したが、遺構は確認されなかった。上畠テラマエ遺跡では小穴が確認され、縄文土器片、須恵器片、石製品が出土した。佐味今田谷内古墳群（旧藤平谷内古墳群）では１号墳（前方後円墳）の攪乱部からガラス玉、鉄製品片が出土し、2 号墳（円墳）の間で溝が確認された。小丸山城跡では土塁や切岸状遺構の確認が行われた。

羽咋市は柳田シャコデ廃寺跡で塔基壇状遺構の周囲を調査し、古代寺院の関連遺構とみられる大型方形柱穴列を検出した。

津幡町は北国街道跡（県史跡）の性格を把握するために道番人屋敷の調査を行った。

金沢市は 11 件の調査を行った。このうち千田北遺跡では弥生時代終末期の川跡、古墳時代前期の土坑、川跡、古代の溝、時期不明の掘立柱建物を確認され、川跡と土坑からは銅鏃、管玉のほか土器が大量に出土した。木越光徳寺跡では中世の区画溝、掘立柱建物、井戸等が確認され、寺跡に関連する遺構と推定されている。砂子坂道場跡では加賀一向一揆関連遺跡の調査で、尾根筋に延びる釜中越などの道跡が延長約 800m の堀と確認され、15 世紀後半の造営である可能性が高いとされる。金沢城下町遺跡関係では、本多氏屋敷跡地区で市史跡「本多家上屋敷西面門跡及び塀跡附道跡」の調査により。道跡では川原石を並べた石段と切石を並べた石段が確認され、道跡法面の石垣裏込めについても構造を確認された。飛梅町３番地点では加賀八家前田家（長種系）の下屋敷地に該当する箇所で近世の土坑、井戸などが確認され、陶磁器類、瓦などが出土した。

野々市市は２件の調査を行った。下林バンジョウアケ遺跡では竪穴建物、掘立柱建物を検出し、9 世紀の集落遺跡が確認された。末松廃寺跡（国史跡）は北陸最古の古代寺院で、史跡再整備のための確認調査で掘立柱建物、区画溝、幢竿支柱穴が確認され、平瓦・瓦塔が出土した。

白山市は３件の調査を行った。このうち小川新遺跡では古代末から中世にかけての掘立柱建物、竪穴状遺構、溝、石組み井戸が確認された。舟岡山城跡（市史跡）の範囲内容確認調査では道跡、石積み遺構、堀跡が確認された。横江荘遺跡の範囲内容確認調査では掘立柱建物跡等が確認された。

能美市は湯屋古窯跡ＡⅡ支群の須恵器窯２基の分布範囲を確認した。

小松市は４件の調査を行った。薬師遺跡では平安時代の掘立柱建物、竪穴建物等が確認された。南野台遺跡では加賀国府推定地で確認調査が行われたが、関連遺構の確定には至らなかった。蓮華寺跡では中宮八院蓮華寺伝承地で確認調査が行われ、9 世紀の須恵器や該期の平坦面が確認された。

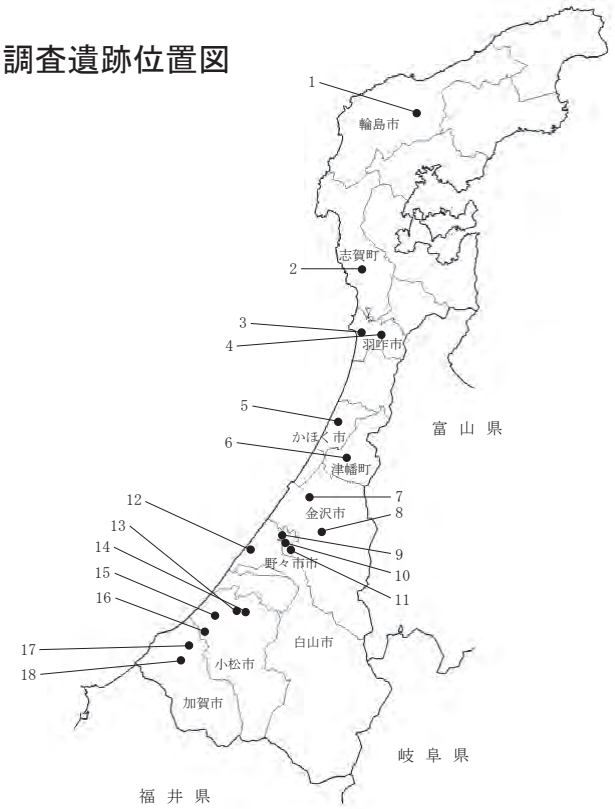
加賀市は九谷磁器窯跡（国史跡）の整備のために１号窯の一部を再調査し、位置座標の確認を行った。「朱田」周辺では、江戸時代前期とみられる造成地の確認を継続した。大聖寺城跡（市史跡）の確認調査では、対面所跡で礎石と見られる遺構の存在等が確認された。

金沢学院大学は金沢市末１号窯跡で調査を継続しており、土師器窯の上面が検出された。

平成27年度発掘調査遺跡

No.	掲載遺跡	遺跡名	所在地	調査面積（㎡）	主な時代	関係機関	関係事業
1	○	中カワナミマエダ遺跡	輪島市三井町中	3,000	奈良・平安	国土交通省	一般国道470号能越自動車道（輪島道路）
2		北吉田ノシロタ遺跡	志賀町北吉田	2,100	弥生～奈良・平安	県土木部	二級河川米町川
3	○	柳田猫ノ目遺跡、柳田シャコデ遺跡、柳田台地遺跡、寺家遺跡	羽咋市寺家町、柳田町	1,630	縄文～中世	県土木部	主要地方道金沢田鶴浜線（のと里山海道）
4		酒井バンドウマエ遺跡	羽咋市酒井町	3,340	古墳、中世	国土交通省	一般国道159号（羽咋道路）
5	○	宇気ボウマワリ遺跡	かほく市宇気	1,050	弥生	県土木部	一般県道黒川横山線
6		杉瀬ニシウラB遺跡	津幡町杉瀬	460	古墳、中世	県土木部	一般県道莇谷津幡線
7	○	福久遺跡	金沢市福久町	1,800	奈良・平安	県土木部	金沢外環状道路（海側幹線Ⅳ期）
8	○	金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）	金沢市東兼六町	230	近世	県土木部	急傾斜地崩壊対策（東兼六町1号）
9		二日市イシバチ遺跡、三日市A遺跡	野々市市二日市町、三日市町	3,070	弥生～古墳、中世	県土木部	二級河川安原川
10	○	末松信濃館跡	野々市市清金1丁目	120	中世	県環境部	県水道用水
11	○	新庄カキノキダ遺跡	野々市市新庄1丁目	2,690	縄文、奈良・平安	県土木部	二級河川高橋川
12	○	小川B遺跡	白山市小川町	2,230	弥生	県土木部	主要地方道金沢美川小松線
13	○	一針C遺跡	小松市一針町	3,500	弥生、古墳、中世	国土交通省	梯川改修
14		漆町遺跡	小松市金屋町	3,460	弥生～中世	国土交通省	梯川改修
15	○	八日市地方遺跡	小松市八日市町地方	1,700	弥生	鉄道運輸機構	北陸新幹線
16		矢田新遺跡	小松市矢田新町	1,520	古墳～中世	県土木部	南加賀道路（粟津ルート）
17	○	庄・西島遺跡、津波倉廃寺	加賀市庄町、津波倉町	5,800	奈良・平安	国土交通省	一般国道8号（加賀拡幅）
18		加茂ボケ生水ウラ遺跡	加賀市加茂町	670	弥生、奈良・平安、中世	県土木部	一般県道片山津山代線
計		18件（本号に掲載していない7件は35号に掲載済み）		38,370			

平成27年度　発掘調査遺跡位置図



中（なか）カワナミマエダ遺跡

所 在 地　輪島市三井町中地内
調査面積　3,000㎡
調査期間　平成 27 年 7 月 1 日～同年 12 月 15 日
調査担当　久田正弘　宮永正則

遺跡位置図（S=1/25,000）

調査成果の要点

・中山間地域を流れる仁行川流域に展開する古墳時代末～室町時代を中心とする集落遺跡。
・柵列に囲まれた範囲に柱穴が集中しており、複数の総柱式掘立柱建物を確認した。

中カワナミマエダ遺跡は、中川や仁行川が合流する地点の西側に位置し、仁行川と丘陵裾に広がる鞍部にはさまれた微高地（標高約 93m）に立地する。発掘調査は能越自動車輪島道路建設に伴い、平成 25 ～ 27 年度にかけて実施した。

調査の結果、ほ場整備や川によって壊された部分はあったが、縄文時代中期中葉と古墳時代末～室町時代（7 ～ 15 世紀）を中心とした遺跡であることが判明した。古代は、板塀列と側柱式掘立柱建物と柱穴を確認した。中世は、川・山側に柵列を設置した中心域があり、総柱式掘立柱建物 9 棟、土坑、室状遺構、溝などを確認した。

主な遺物は、縄文土器・石器、古墳時代末～平安時代の須恵器・土師器や沿岸部で作られた製塩土器、中世では土師器皿・珠洲焼・青磁・白磁、瀬戸・美濃焼、中国製銅銭、高島石製硯、砥石、切石などが出土した。

輪島市三井町は、中世には鳳至郡大屋荘三井保であり、この荘園は京都市にある崇徳院御影堂の所領であり、本遺跡も三井保を構成する集落であったと思われる。　（久田正弘）

調査区遠景（北から）

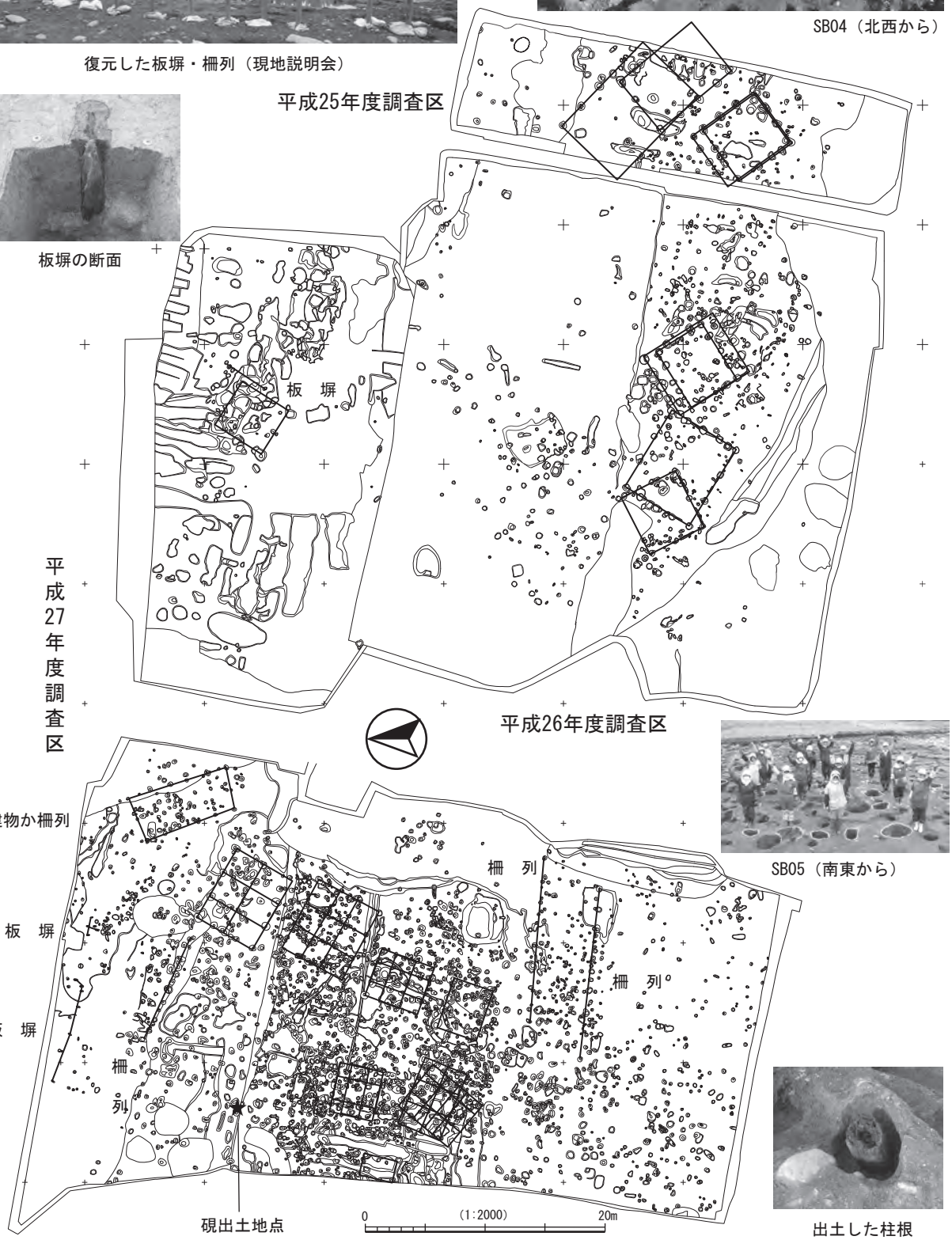
SB03（北西から）

高島石製硯

復元した板塀・柵列（現地説明会）

SB04（北西から）

板塀の断面



SB05（南東から）

出土した柱根

調査区全体図

柳田猫ノ目遺跡他3遺跡（寺家遺跡、柳田シャコデ遺跡、柳田台地遺跡）

所 在 地　羽咋市寺家町、柳田町地内　　調査期間　平成27年11月2日～平成28年2月22日

調査面積　1,630㎡　　調査担当　久田正弘　中森茂明　安中哲徳　萩山教俊

遺跡位置図（S=1/25,000）

調査成果の要点

- 弥生時代から中世の集落域や生産域などを確認し、砂丘に堆積した砂や洪水砂などを挟み最大4層の遺構面を確認した。
- 集落域では、掘立柱建物や井戸などを検出し、弥生土器や土師器、須恵器、陶磁器などが出土した。生産域では、水路や畦状遺構、畝溝状遺構などを検出した。
- 寺家遺跡では、史跡隣接地点に直線状に延びる中世の土塁と側溝を確認した。

調査地の遠景（北から南方向へ）

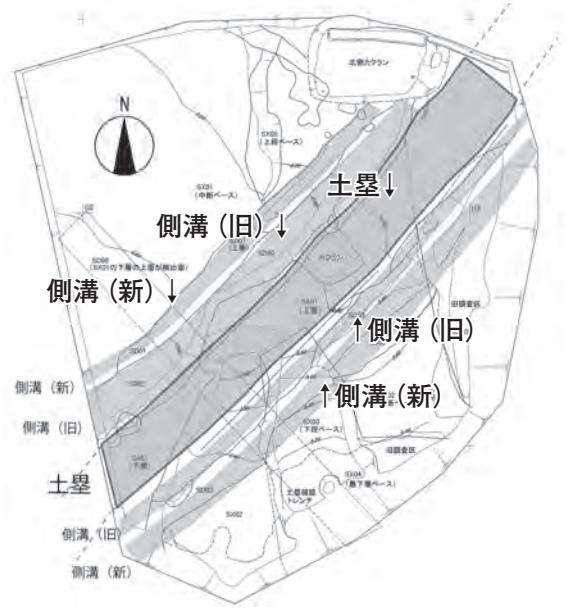
羽咋市寺家遺跡は、昭和53年に能登有料道路（現在の「のと里山海道」）建設に関わる工事の際に発見された、海岸砂丘に埋もれた奈良・平安時代を中心とする遺跡である。その後の発掘調査により古代の祭祀の跡や、関連する施設、使用された祭祀遺物が多数発見され、「渚の正倉院」とも呼ばれており、平成24年1月に国の史跡に指定された。

今回は、羽咋市教委調査分も含めて、寺家遺跡の第20次調査となる。

今回の調査では、道路拡幅に伴う橋脚建設部分の調査であった。寺家遺跡の北側に隣接する柳田猫ノ目遺跡、柳田シャコデ遺跡、柳田台地遺跡も含め弥生時代から中世の集落域や水田などの生産域を検出砂丘に堆積した土砂や洪水砂等の堆積を挟み遺構面が重複している状況を確認した。

遺構では掘立柱建物、柱穴、井戸、土坑、畦状遺構、畝溝、水路、溝、小穴などを多数検出し、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、木製品、石製品、金属製品などの遺物が多く出土した。

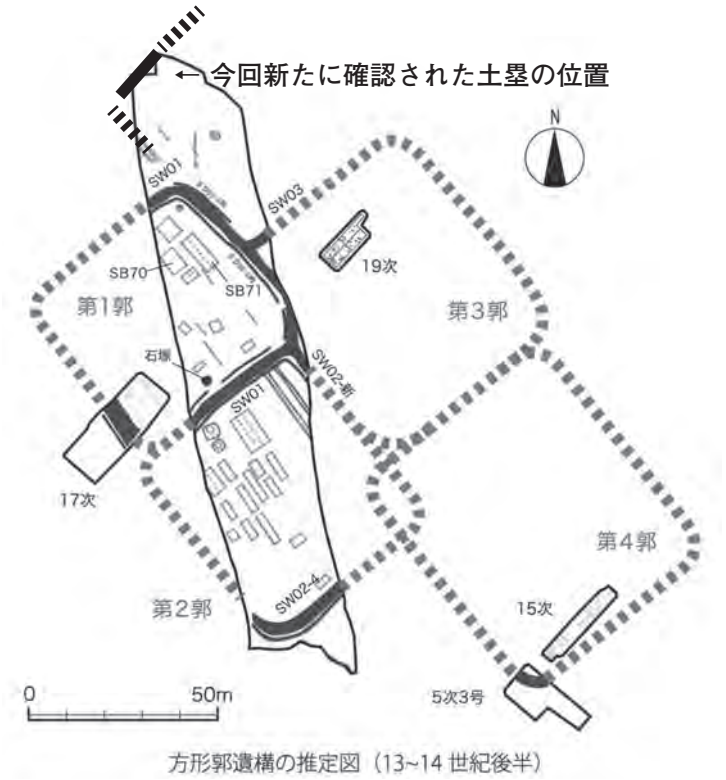
特に寺家遺跡史跡指定地の東側地点で検出された直線状に延びる中世の土塁と側溝は、遺跡の変遷を考える上でも貴重な発見となることから、隣接地の史跡と合わせ保存できるよう、調整中である。



寺家遺跡で新たに確認された中世の土塁と側溝

寺家遺跡

奈良・平安時代から中世の集落域及び生産域を確認した。柱穴、畝溝や中世の土塁と側溝などの遺構を検出し、土師器、須恵器、珠洲焼などの遺物が出土した。過去の調査でも１辺が50m以上の方形区画を持つ土塁状遺構が複数確認されており、今回発見された土塁も新たな方形区画の一部に当たると考えられる。



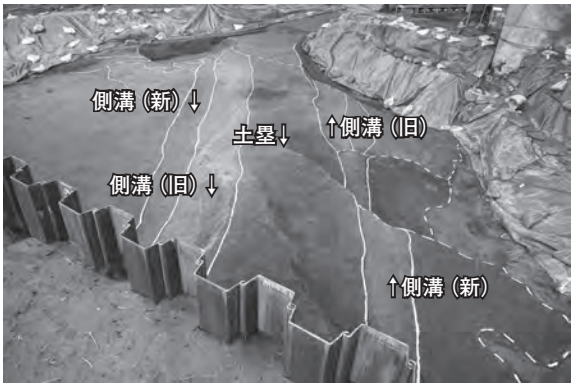
これまでの調査で確認されている寺家遺跡の土塁状遺構
（羽咋市『寺家遺跡　発掘調査報告書総括編』を一部改変）

柳田猫ノ目遺跡

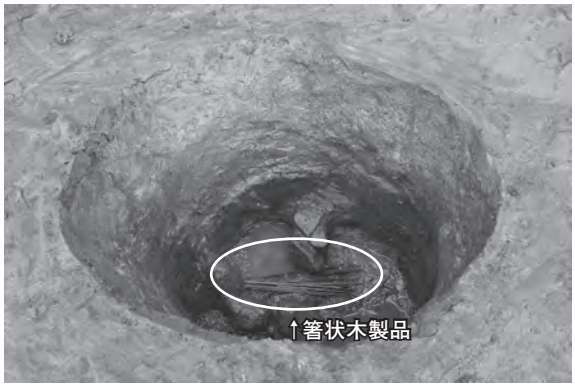
最大４面の遺構面を対象として調査を行い、弥生時代から中世の集落域及び生産域が洪水砂等の堆積を挟み重複している状況を確認した。掘立柱建物、井戸、土坑、畦状遺構、畝溝、溝などの遺構を検出し、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、木製品、石製品、金属製品などの遺物が多く出土した。

柳田シャコデ遺跡、柳田台地遺跡

丘陵裾部を２面の遺構面を対象として調査を行い、丘陵上に展開する古墳時代から中世の集落域の縁辺部を確認した。掘立柱建物、土坑、溝などの遺構を検出し、土師器や須恵器、珠洲焼の他、古墳時代後期の土師器や須恵器、木製品が溝や落込みからまとまって出土した。　（中森茂明・安中哲徳）



寺家遺跡（中世の土塁と側溝など）



柳田猫ノ目遺跡（箸状木製品が出土した井戸）

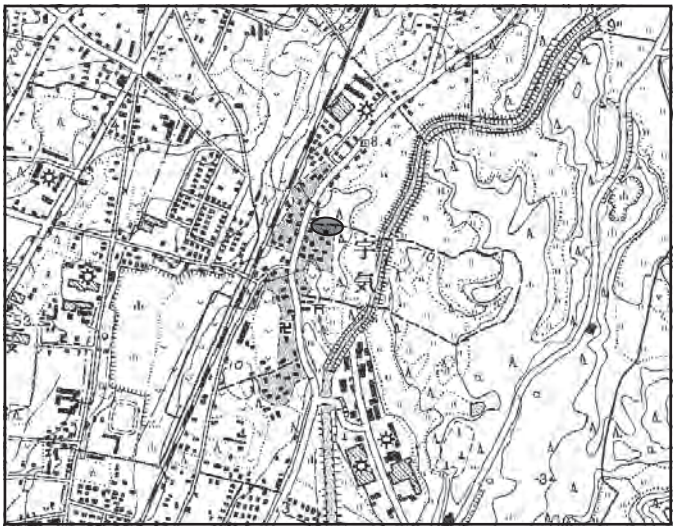
柳田猫ノ目遺跡（中世の掘立柱建物・井戸など）

柳田シャコデ遺跡、柳田台地遺跡（古墳時代から中世の掘立柱建物・溝・落込みなど）

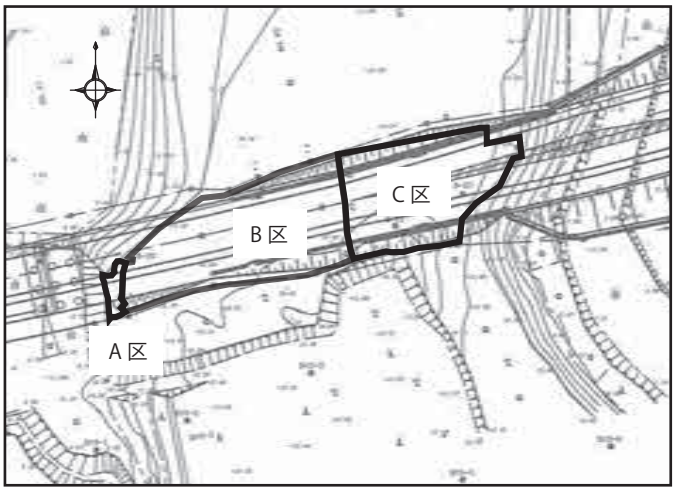
宇気（うけ）ボウマワリ遺跡

所 在 地　かほく市宇気地内　　調査期間　平成 27 年 7 月 28 日～同年 11 月 5 日

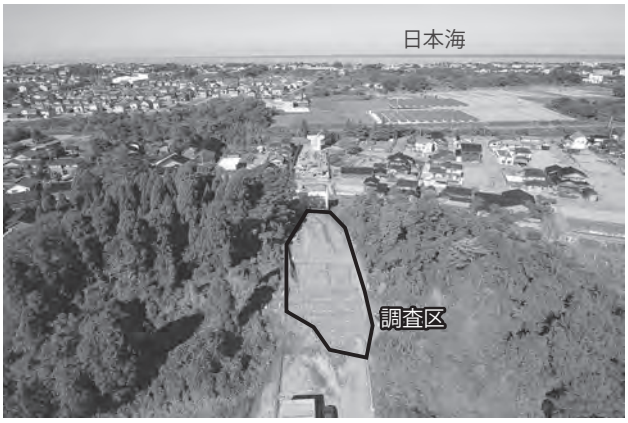
調査面積　1,050㎡　　調査担当　熊谷葉月　瀧野勝利



遺跡位置図（S=1/25,000）



調査区配置図



遺跡遠景（東から）

調査成果の要点

・A 区で古墳時代の竪穴建物と土坑を検出した。

・B・C 区で竪穴建物、掘立柱建物、柵列、溝、土坑、多数の小穴などを検出したほか、平安時代の土器埋納小穴を検出した。

遺跡は、宇ノ気川西側の標高 14.5m 前後の丘陵上に立地する。調査は県道黒川横山線改築事業に伴うもので、新発見の遺跡である。同丘陵上の南側には、宇気 C 遺跡（弥生）、谷を挟んで東側の丘陵には、宇気塚越遺跡（弥生）・古墳群などが所在する。ボウマワリの地名は、源平合戦時、坊廻景政が土塁を設けたという伝承による。

A 区の竪穴建物は方形で南北辺 3.8m、西側は削られており、東西辺 2.5m を検出した。古墳時代中期に属する。埋没後、古墳時代後期に深さ径 1.2m、深さ 1.2m の土坑が床面より下まで掘り込まれていた。

B・C 区では、全体的に平坦に削平されており、竪穴建物は、円形の壁溝のみ、あるいは炉（焼土）と主柱穴のみ検出されたものなどがある。いずれも古墳時代に属するものと思われる。掘立柱建物は 7 棟を確認している。300 以上の小穴を検出しており、深さ 70㎝以上と深いものも多いが、柱穴であるかは今後検討が必要である。土器埋納小穴は径 20cm、深さ 25cm で、10 世紀代（平安時代中期）の土師器椀 2 個体が出土した。

C 区で検出した中世の溝 2 条は、幅 2m と 1.5m で、緩やかな東斜面に直行しており、土師器皿、白磁皿、青磁碗、珠洲焼などが出土している。平坦面造成など開削に関連するものと考えられる。柵列はこれらの溝と方向軸が似ていることから、中世に属するものと思われる。（熊谷葉月）

A 区　竪穴建物（SI1）

B 区　土器埋納小穴（P11）

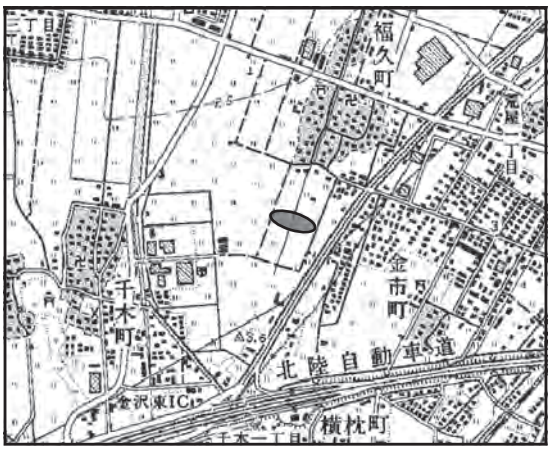
B 区　掘立柱建物（SB2）

B 区　竪穴建物の壁溝（SI2）

遺構図（S=1/300）

福久（ふくひさ）遺跡

所 在 地　金沢市福久町地内
調査面積　1,800㎡
調査期間　平成 27 年 10 月 22 日～平成 28 年 1 月 6 日
調査担当　熊谷葉月　瀧野勝利



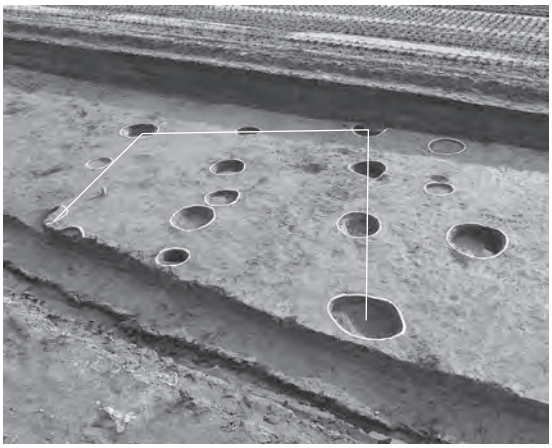
遺跡位置図（S=1/25,000）

調査区全景（東から）

遺跡は、金沢市北部に位置し、河北潟から南東に約 3㎞の沖積地に立地する。調査は金沢外環状道路海側幹線Ⅳ期事業に伴うものである。

掘立柱建物、溝、旧河道などを検出した。掘立柱建物は、梁行 2 間・桁行 3 間以上の 1 棟を検出した。溝は幅 0.3 ～ 0.5m 程度で、東西あるいは南北方向を中心とした 8 条を検出した。中には付け替えをしたものもある。区画溝あるいは用排水路の可能性が考えられる。うち 1 条からは木製の田下駄が出土した。そのほか、南から北へ流れる幅 2m 以上の旧河道を調査区の東西両端で検出した。後世の削平により、遺構はいずれも非常に浅く、密度もまばらである。遺物も木製品のほか、奈良・平安時代の須恵器・土師器が少量出土している。遺跡周辺は多数の旧河川が埋まった湿地帯で、比較的標高の高いところのみ建物が分布する集落域であり、ほとんどが水田域であったと思われる。今回の調査区は集落の南端の縁辺部であると考えられる。（熊谷葉月）

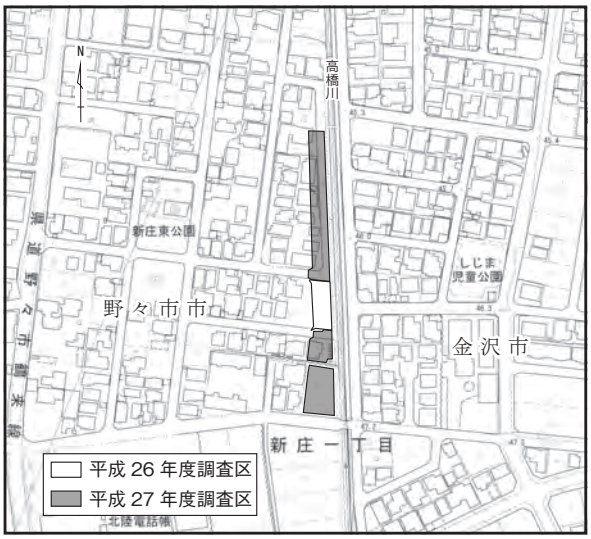
田下駄出土状況


掘立柱建物

新庄（しんじょう）カキノキダ遺跡

所 在 地　野々市市新庄１丁目地内　　調査期間　平成 27 年 4 月 15 日～同年 8 月 18 日
調査面積　2,690㎡　　調査担当　水田　勝　林　大智

遺跡位置図（S=1/25,000）



調査区位置図（S=1/5,000）

遺跡は、野々市市南東部にひろがる住宅地内に所在し、白山を源流とする一級河川手取川により形成された大規模扇状地（手取川扇状地）の扇央部東端に立地する。

発掘調査は、市域東半を南北に流れる高橋川の広域河川改修事業に係り、河川左岸部を対象として平成 26・27 年度に実施した。

平成 26 年度の調査では、縄文時代晩期の建物や、平安時代中頃の掘立柱建物柱穴、建物周囲に配置された区画溝などが確認されている。

今回（平成 27 年度）の調査では、平成 26 年度調査区を挟む南北両側に調査区が設定され、北側調査区では弥生時代後期の竪穴建物、土坑などを確認した。竪穴建物は、長辺 8m を測り内部には主柱穴 2 基と貯蔵穴を検出した。

また、北側調査区中央付近からは、縄文時代後期の土器が出土しており、遺跡の開始時期が縄文時代後期まで遡ることを明示している。

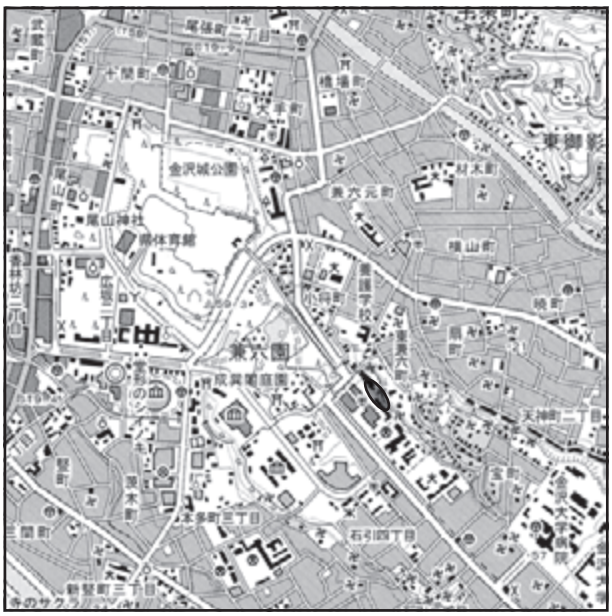
南側調査区では、平安時代後期の掘立柱建物や小穴で構成される居住域や、これらと部分的に重複しながら東西方向に並列する多数の耕作溝群を検出した。平安時代の本遺跡周辺では、比較的小規模な居住域の隣接地が畠として利用されていたことを窺える。　（林　大智）

遺跡の遠景（北から）

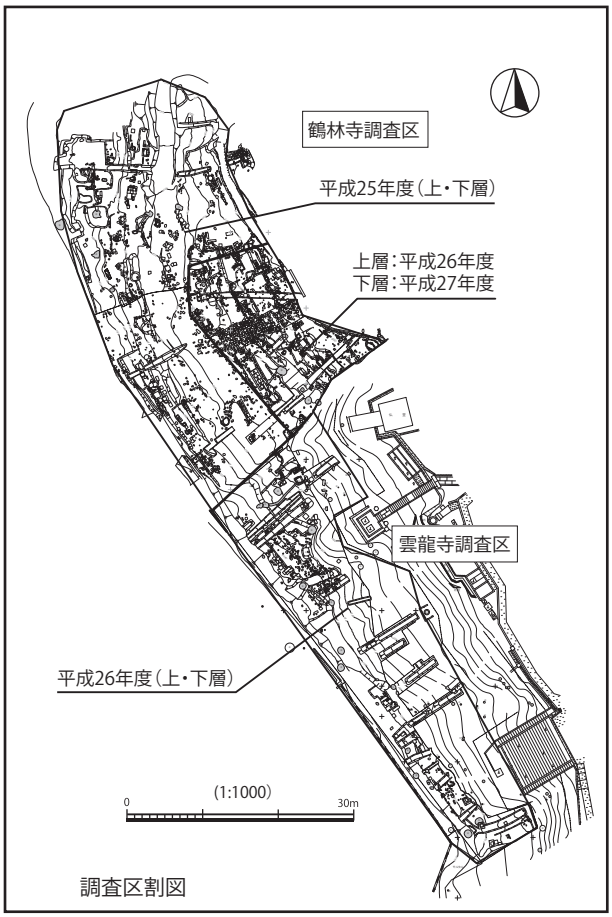
弥生時代後期の竪穴建物（北から）

金沢城下町遺跡（東兼六町５番地区）

所 在 地　金沢市東兼六町地内
調査面積　230㎡
調査期間　平成27年5月18日～同年8月4日
調査担当　和田龍介　神谷英生



遺跡位置図（S=1/25,000）



調査区割図（S=1/1,000）

調査成果の要点
- 江戸時代の城下町遺跡（墳墓跡）である。
- 鶴林寺の旧墓地跡の調査を実施した。
- 土葬（甕棺、木棺）が主体で、狭い面積にもかかわらず、約60基の甕棺・木棺を確認することができた。

平成26年度に実施された調査の継続である。今年度で3次調査となり、トレンチ調査で確認されていた鶴林寺旧墓地跡下段の第2面（江戸時代中期以降～）の調査を実施した。旧墓地跡は寺の背後の崖地に営まれていたもので、崖地の保全を目的とする急傾斜地崩壊対策工事を契機として調査に至ったものである。

平成26年度に調査に至らなかった鶴林寺旧墓地の下段部分の第2面調査を実施した。下段部分の第1面（近代以降～）は大きく2段の平坦面で構成されていたが、第2面もほぼ同様の状況を呈し、基本的な2段テラス状の墓地構成に変化がないことが確認できた。また大型の亜円礫で作られていた上段への石階段を撤去したところ、第2面に相当する層からは遺構を確認することができなかった。このことから、テラス状の墓地構成とともに石階段も基本的には第2面時から引き続き使われていたものと考えることができる。

埋葬施設の構成は、これまでの第2面調査と変わらず土葬を基本とし、木棺墓と推定できる方形土坑と越前焼大甕を棺とする甕棺墓が主である。調査区の南側（石階段以南）は特に埋葬施設の重複が著しく、ほぼ全面に方形土坑・甕棺が切り合いながら分布していた。切り合いも方形土坑・甕棺いずれが先行するわけでなく、ほぼ同時期に・選択的に埋葬方法が存在していたことをうかがわせる。

今年度調査の甕棺の中には、豊富な副葬品を持つものが多く確認された。棺の掘り方に多量のままごと道具（ミニチュア土製品）を入れたものや、2枚の柄鏡を棺内に収めたもの、金蒔絵が美しく残るべっこう製飾櫛や笄を収めるものなどが相次いで確認され、これまで銅銭・土人形が基本的な副葬品だった事例に新しい所見を加えることができた。（和田龍介）

甕棺出土のべっこう製装飾具

甕棺が切り合う状況

末松信濃館跡（すえまつしなのやかた）

所 在 地　野々市市清金１丁目地内　　調査期間　平成 27 年 12 月 1 日～同年 12 月 21 日

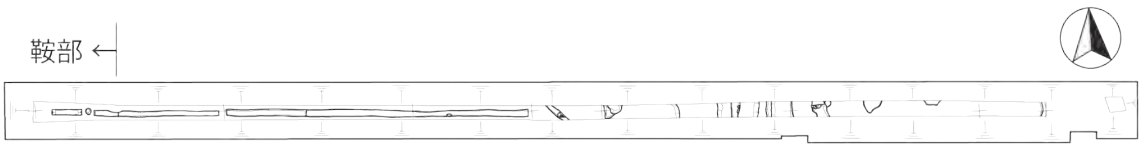
調査面積　120㎡　　調査担当　岩瀬由美　関　晃史

遺跡位置図（S=1/25,000）

遺跡は野々市市南部に位置し、手取川扇状地の扇央部に立地している。

石川県水道水供給事業に伴い、現道下を 1m 程度の幅で発掘調査を行った。その結果、調査区西半で包含層の堆積を確認し、西側へ落ち込む鞍部を検出、東半で古代のピットや時期不詳の溝を検出した。この鞍部は遺跡想定範囲の西端部に位置することから、隣接して西側に展開する古代の集落遺跡として知られる清金アガトウ遺跡と本遺跡とを隔てる地形の痕跡である可能性が高い。狭小な調査区であるうえに、出土した遺物がごく少量であるため、遺跡の様相は詳らかでないが、清金アガトウ遺跡と同時期に営まれた小規模な集落が想定される。

かつて堀があったとの伝承があるために館跡の遺跡名が付されているが、今回の調査ではその痕跡は確認されなかった。　（岩瀬由美）



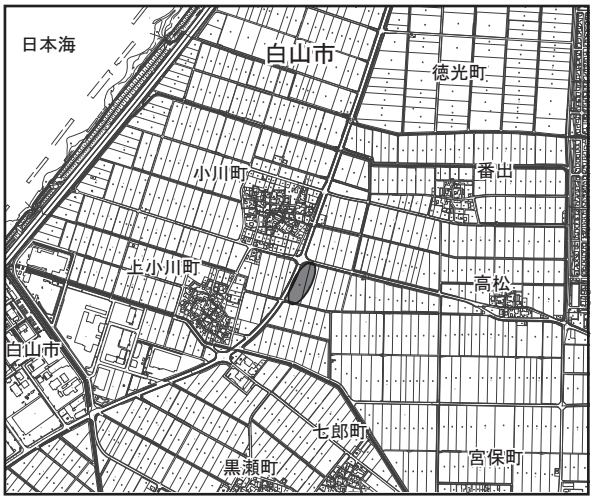
調査区全体図（S=1/400）

調査区西半完掘状況

調査区東半完掘状況

小川（おがわ）B 遺跡

所 在 地　白山市小川町内
調査面積　2,230㎡
調査期間　平成 27 年 8 月 17 日～同年 11 月 30 日
調査担当　澤辺利明　瀧野勝利　武部修一



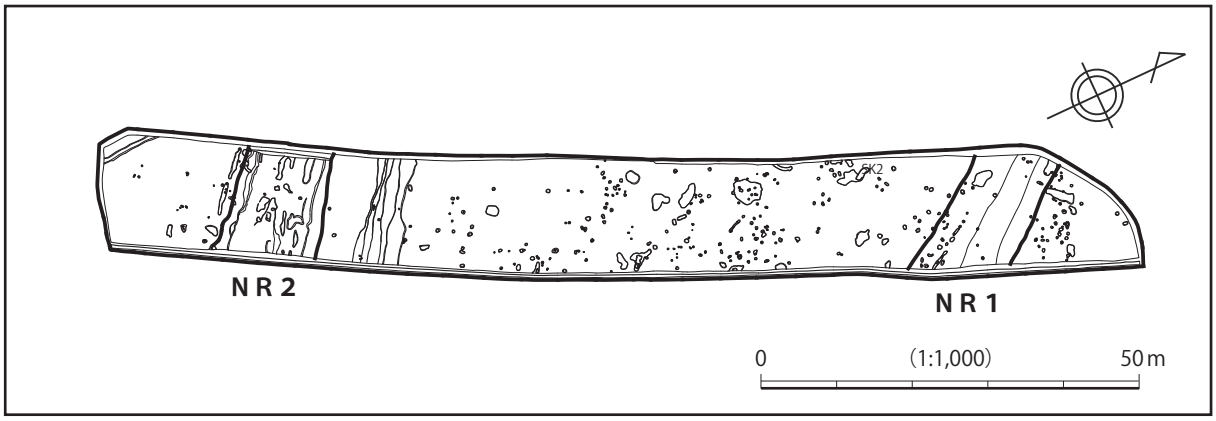
遺跡位置図（S=1/25,000）

NR2 完掘状況（北から）

遺跡は白山市北西部にあって、県内最大の河川、手取川により形成された扇状地先端部に位置し、その西方約 750m で日本海にいたる。

発掘調査は一般県道金沢美川小松線改築工事に伴うものであり、本事業に関しては平成 25・26 年度に、小川 B 遺跡北方約 1km の地点において徳光聖興寺遺跡、徳光ヨノキヤマ遺跡の調査が実施されている。

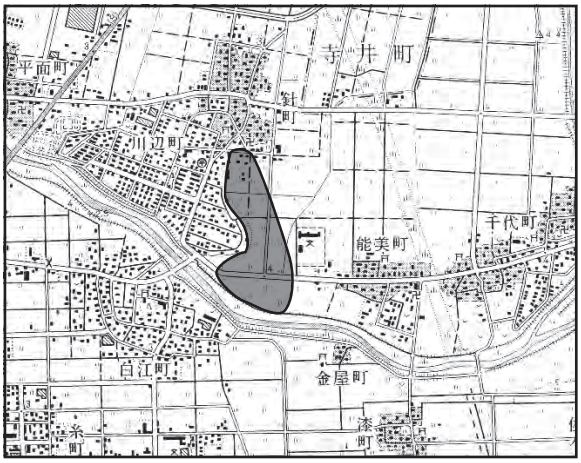
道路拡幅部分にかかる調査区域は幅約 17m、延長約 130m と南北に細長い形状をなし、周辺の地表高は 8.2m、遺構検出面標高は 7.3m 前後を測る。調査の結果、調査区の南端および北端で、調査区を南東から北西に横断する幅約 10m、深さ 0.5 ～ 1m の河道（NR1・2）を確認した。その下半の覆土は腐植物を多く含む黒色泥炭質土であり、遺跡が営まれた当時は水の滞留した沼地であった可能性がある。河道底では弥生時代後期後葉の土器が比較的まとまって出土しており、当該期の集落は NR1・2 間の幅約 80m の微高地上に営まれたものとみられる。微高地上では土坑や溝を検出したが全般に遺構・遺物の密度は低く、集落の中心は調査区外に求められよう。（澤辺利明）



調査区全体図（S=1/1,000）

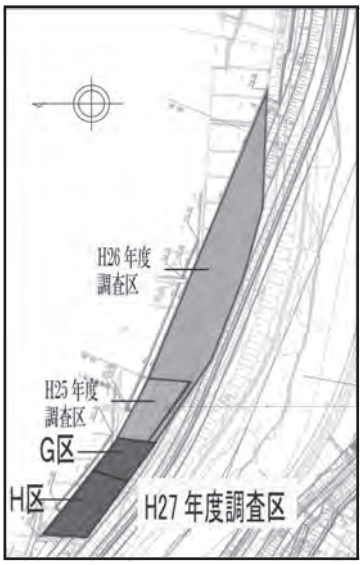
一針（ひとつはり）C 遺跡

所 在 地　小松市一針町地内
調査面積　3,500㎡
調査期間　平成 27 年 4 月 20 日～同年 10 月 30 日
調査担当　久田正弘　宮永正則　安中哲徳　萩山教俊
横山純子



遺跡位置図（S=1/25,000）

調査地の遠景（東から日本海を望む）



一針 C 遺跡の調査区割図

調査成果の要点

- 上下 2 層の遺構面を確認し、一部では上中下 3 層の遺構面を確認できた。
- 上層では昨年度の成果に加え、古墳時代前期の遺物（勾玉・合子など）や古代の軒平瓦、中世の網カゴ状木製品・タモ網枠木が出土した。
- 古代から中世の井戸を多数検出し、さまざまなタイプの井戸枠が確認できた。
- 下層では弥生時代中期後半から終末期の掘立柱建物、平地式建物、溝、土坑墓、それらに伴う土器のほか緑色凝灰岩製管玉・未成品、石鏃、石庖丁など多くの遺物を確認できた。

一針 C 遺跡は小松市の北端、梯川右岸に位置し、弥生時代中期から中世まで断続的に続く集落遺跡である。調査は梯川改修に伴う築堤工事によるもので平成 25 年度より継続し、3 次調査にあたる。

昨年度までの調査では梯川の旧流路と古代・中世の遺構を検出した上層、弥生時代中期から古墳時代前期の遺構を検出した下層の上下 2 面（一部で 1 面）にわたる遺構面とその範囲を確認し、弥生時代から中世の集落および墓域を検出した。

最終年となる今年度は平成 25・26 年度調査区の西側区域を調査対象として上下 2 面（一部で 3 面）の遺構面を確認した。

今年度上層では、古墳時代前期から中世末の平地式建物、掘立柱建物、柵、井戸、竪穴状遺構、土坑、溝、畝溝、小穴などの遺構を検出した。古代の井戸では縦板組のほか、横板組の井戸枠の内側にさらにくり抜き材を組み合わせた井戸枠を置き、底部分には浄水目的を推定できる網代を敷いた特殊なものも検出された。中世では結桶組の井戸枠が検出されており、その他の井戸からは網カゴ状木製品（箕）やタモ網の枠木・古瀬戸の縁釉小皿・銅銭などが出土している。井戸と周辺に建つであろう建物の関係については今後の検討課題である。

また井戸以外で特徴的なものとして、一点ではあるが、柱穴から平安時代の軒平瓦の破片が出土している。これまで遺跡周辺で出土した古代瓦は表土や包含層からの出土がほとんどであったため、遺構出土という点で特筆すべきものである。

このほか調査区を南北に縦断するように区画する溝とそれに伴うかのような竪穴状遺構を検出した。これらは用排水路と貯水池、または中世の屋敷を区画する溝と園池、などさまざまな可能性が推測できるがその性格については出土遺物の検討を待ちたい。

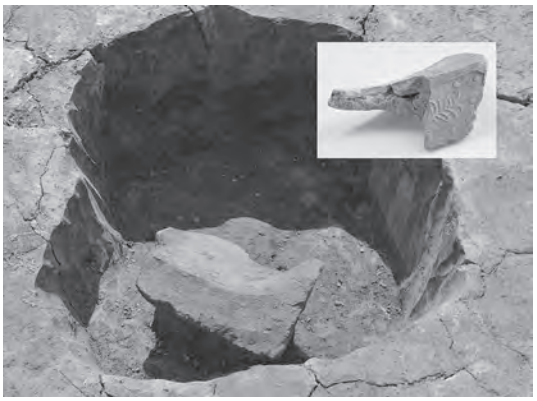
古墳時代前期の遺構・遺物がまとまって確認されたことは今年度の新たな成果であり、多数の土器とともに勾玉、石製合子など通常集落では見られない遺物が出土している。

下層では弥生時代中期後半から終末期の掘立柱建物、平地式建物、溝、土坑墓、それらに伴う土器のほか緑色凝灰岩製管玉・同未成品、石鏃、石庖丁など多くの遺物を確認できた。

今回の調査では、昨年度検出された弥生時代の環濠や墓域の西側にも弥生時代から中世の集落が展開することが判明し、新たに古墳時代前期の遺構・遺物も確認できた。また過年度に続き古墳時代前期から古代にかけて埋没した梯川旧流路の延長を確認でき、埋没過程と遺構形成の関係を明らかにすることができた。

当遺跡の南西約2.5㎞に位置し、南加賀地域における大規模な拠点集落として中核的存在であった八日市地方遺跡は弥生時代中期末頃から衰退する。それと入れ替わるように成立した一針C遺跡は、その様相や時期変遷をもとに弥生時代中期から古墳時代前期にかけて周辺の一針B遺跡や漆町遺跡、千代・能美遺跡とともに梯川中流域の中心的役割を担う集落であったと考えられる。今後は遺物の時期検討から弥生時代の墓域と集落域の並行関係を明らかにすること、古代から中世における遺構群の関係性や集落の時期変遷、中世墓地の検討などが課題である。

（横山純子）

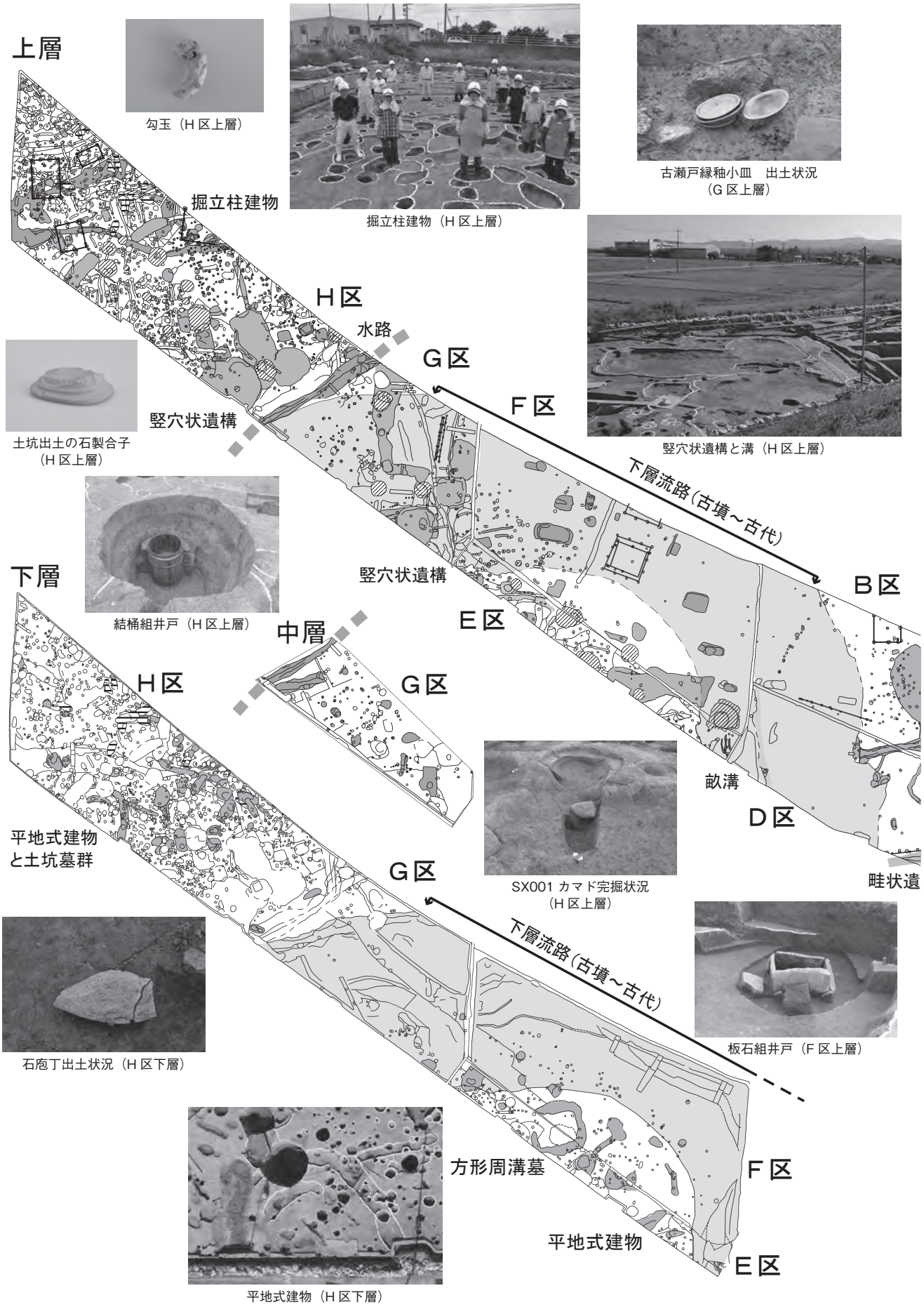


軒平瓦出土状況

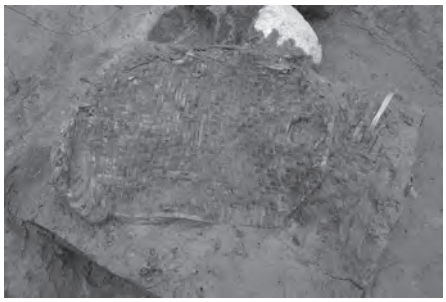
調査区（上層）の全景（井戸と掘立柱建物）

外枠横板組・内枠くり抜き・網代敷の井戸

弥生時代の土坑墓


上層
勾玉（H 区上層）
掘立柱建物
掘立柱建物（H 区上層）
古瀬戸緑釉小皿　出土状況
（G 区上層）
H 区
水路
G 区
F 区
竪穴状遺構
土坑出土の石製合子
（H 区上層）
竪穴状遺構と溝（H 区上層）
下層流路（古墳～古代）
結桶組井戸（H 区上層）
下層
竪穴状遺構
B 区
E 区
中層
H 区
G 区
畝溝
D 区
平地式建物
と土坑墓群
SX001 カマド完掘状況
（H 区上層）
畦状遺
G 区
下層流路（古墳～古代）
石庖丁出土状況（H 区下層）
板石組井戸（F 区上層）
方形周溝墓
F 区
平地式建物
E 区
平地式建物（H 区下層）

一針Ｃ遺跡遺構配置図


木製編カゴ（箕）出土状況（H 区上層）

遺構凡例

- ：弥生時代中期～古墳時代前期の遺構
- ：弥生時代中期～古墳時代前期の土坑墓
- ：古墳時代前期から古代の川
- ：古墳時代後期～中世の遺構
- ：古墳時代後期～中世の井戸
- ：中世の遺構

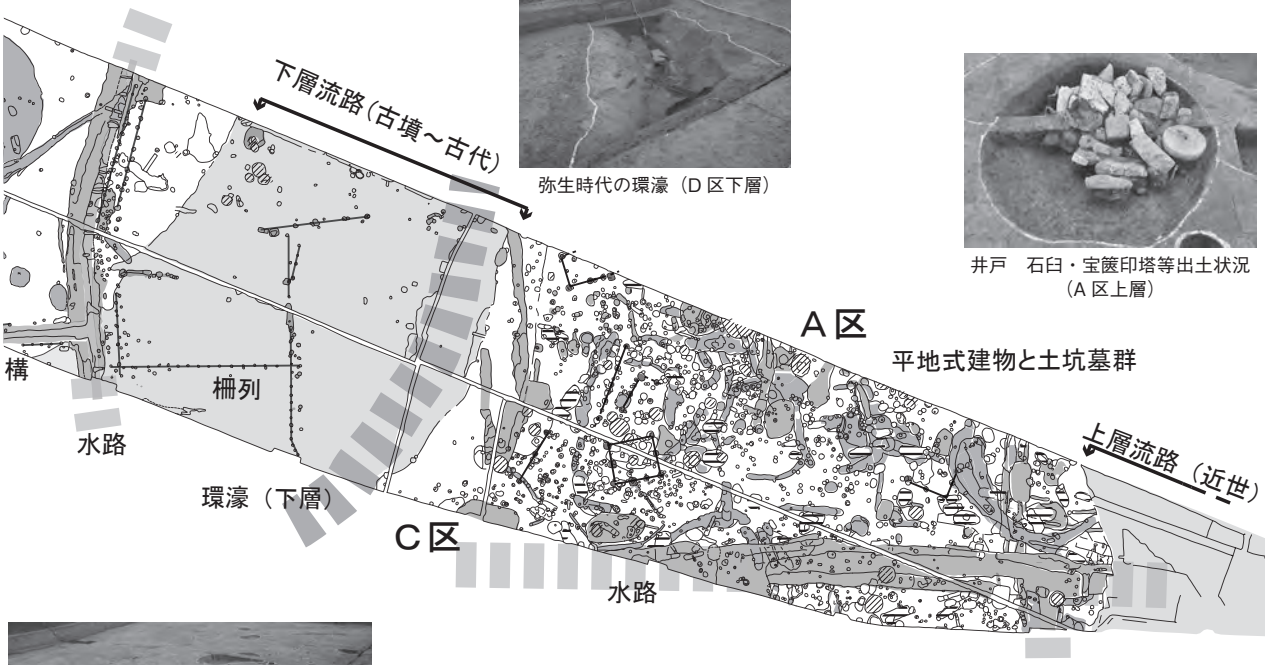
掘立柱建物（F 区上層）

平地式建物調査風景（A 区上層）

タモ網枠木・エブリ状木製品等
出土状況（G 区上層）

弥生時代の環濠（D 区下層）

井戸　石臼・宝篋印塔等出土状況
（A 区上層）



方形周溝墓（F 区下層）

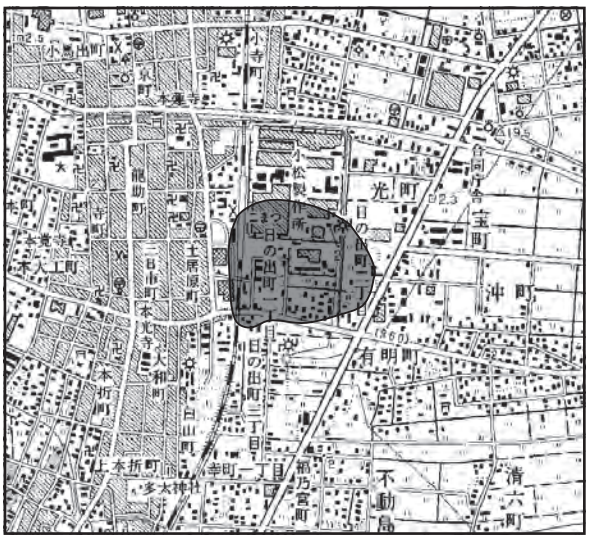
畦状遺構・溝と柵列
（B・D 区上層）

土坑墓　検出状況（A 区上層）

0　30m
（1:750）

八日市地方遺跡（ようかいちじかた）

所 在 地　小松市土居原町地内
調査面積　1,700㎡
調査期間　平成 27 年 9 月 15 日～平成 28 年 1 月 22 日
調査担当　水田　勝　林　大智　神谷英生



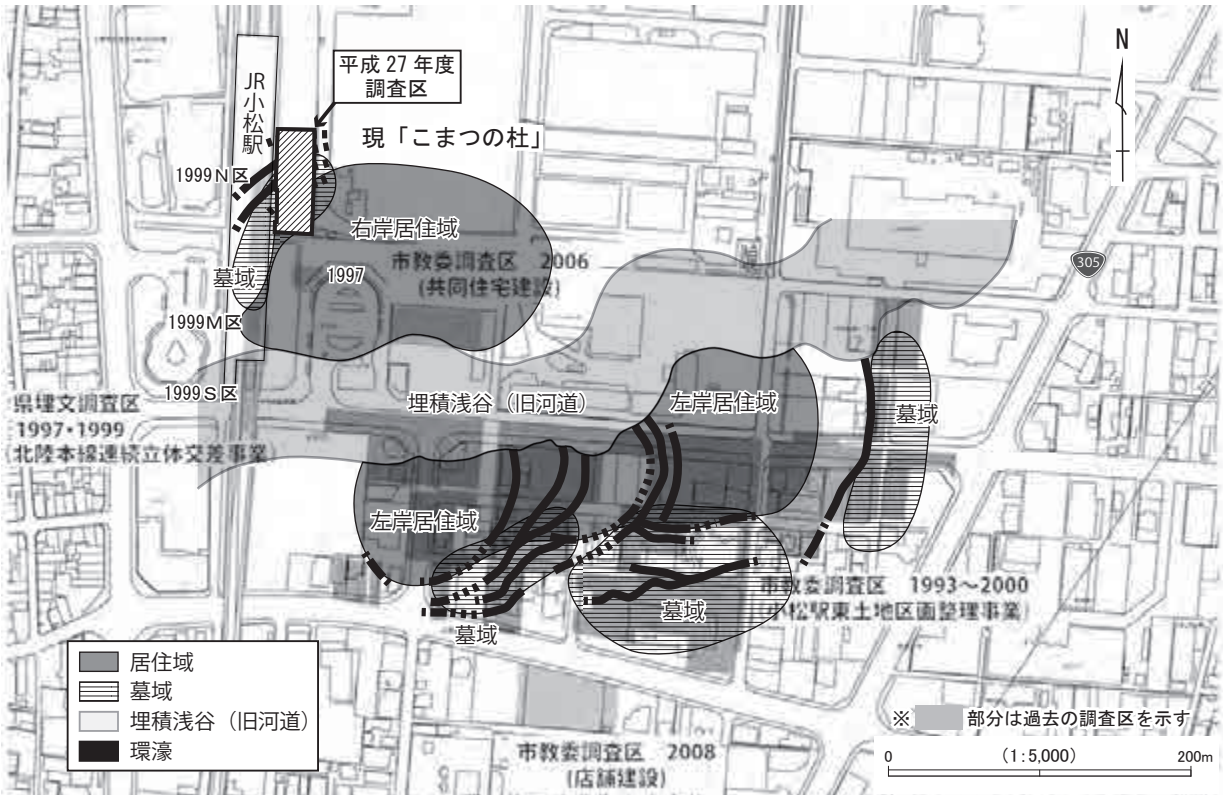
遺跡位置図（S=1/25,000）

調査成果の要点

- 周囲に平坦な沖積低地がひろがる水上交通の要衝に営まれた弥生中期の大規模集落。
- 遺跡北西部にあたる箇所の発掘調査を実施。
- 調査区南側では、掘立柱建物、平地建物、方形周溝墓などが密集する状況を確認。
- 調査区中央から北側では、集落北辺を取り囲む環濠４条や方形周溝墓などを検出した。
- 室町時代の井戸３基を確認。当期の集落が、調査区周辺に展開していたことを窺わせる。

八日市地方遺跡は、JR 小松駅東側一帯にひろがる北陸を代表する弥生時代中期の大規模環濠集落で、平坦な沖積低地に形成された南北方向に長い浜堤状の微高地（標高１～2m）に立地している。遺跡の推定面積は、15 万㎡を超える。

遺跡の南西側には、かつての干拓事業で農地化した今江潟、南側には木場潟、さらに北東側は梯川とその支流の合流地点にあたり、水上交通の要衝に位置する遺跡として捉えることができる。



調査区の位置と遺跡概要図（縮尺 :1/5,000）

八日市地方遺跡の存在は、戦前から地元の方々に知られており、これまで数多くの試掘・発掘調査などが行われている。なかでも、小松市教育委員会が、平成5（1993）年度から平成12（2000）年度にかけて実施した小松駅東土地区画整理事業に係る発掘調査では、平地建物、掘立柱建物、井戸などで構成された居住域や、居住域に隣接して築かれた方形周溝墓を主体とする墓域、集落を囲繞・区画するように掘削された多重の環濠などが確認された。また、この調査では、数十万点におよぶ膨大な出土品が見つかっており、そのうち1,020点は平成23年に国の重要文化財に指定されている。

一方、石川県では、平成9（1997）年度に小松駅付近連続立体交差事業に係る発掘調査（面積:270㎡）や、平成11（1999）年度に小松駅舎本体工事に係る発掘調査（面積:6,000㎡）を実施しており、平成27（2015）年度からは北陸新幹線建設に係る発掘調査を開始している。

平成27年度の発掘調査は、遺跡の北西部にあたる平成11年度県調査区（1999N区）の隣接箇所に調査区（面積:1,700㎡）が設定され、調査区南側では、近世以降に設置された石垣や石列、溝などにより一部損壊しているが、弥生時代中期の掘立柱建物、平地建物、柱穴、土坑墓、方形周溝墓などが密集する状況を確認した。平地建物は、主柱穴が多角形に配置され、その周囲に直径10m前後で円や楕円形を呈する土坑を連ねた外周溝が認められる。この平地建物は、掘立柱建物や方形周溝墓と重複しており、調査区周辺の景観が、弥生時代中期の間で幾度も変遷したことを窺える。

調査区中央から北側では、東から南西方向に並走する4条の環濠を確認した。環濠は、環濠1で幅3.5m、深さ1mを超える規模を有し、横断面の形状は逆台形を呈する。環濠間には、土塁が存在していたことを想定でき、高まりを利用した方形周溝墓が築かれている。なお、環濠1の覆土中位からは、杭、枝付きの木材、枝材などが多数出土しており、愛知県朝日遺跡の環濠内に設置された「逆茂木」と呼称される施設に類似した検出状況を示す。

弥生時代中期の出土遺物は、調査区全域で確認でき、過去の発掘調査と同様に多数の土器、石器、玉作関連資料などがみられる。なかでも、小松市菩提町や滝ヶ原町周辺に産出する緑色凝灰岩を使用した管玉の製作関連資料は充実しており、管玉の完成品、製作途中の分割品、原石だけでなく、緑色凝灰岩を擦り切って分割する石鋸、砥石、管玉に孔をあける石針などの製作工具も確認できる。また、新潟県糸魚川市姫川流域などで産出し、勾玉の原材料となるヒスイが出土しており、擦り切って分割した痕跡を残す剥片も確認できる。その他、特筆すべき出土品としては、表面に鋭利な工具で文様を施した「線刻のある砥石」や、土坑（SK119）から出土した編物があげられる。

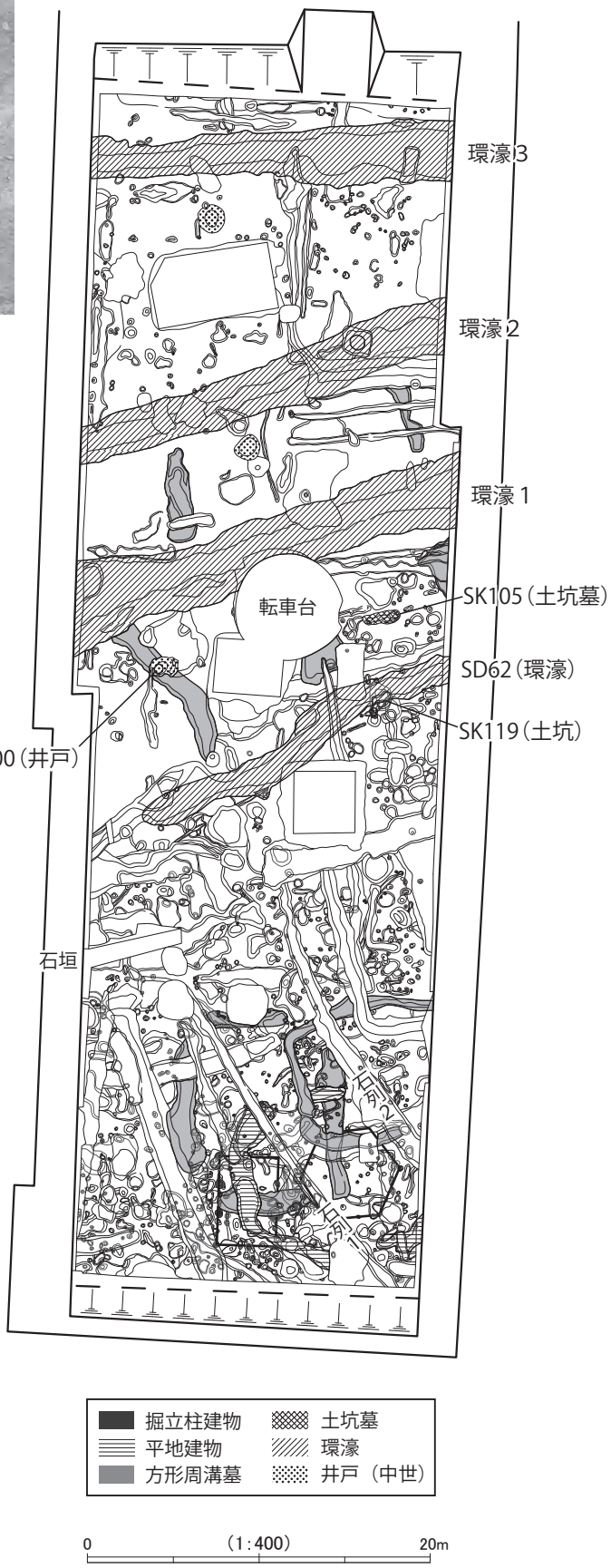
弥生時代中期以外の遺構としては、環濠帯と重複する範囲で室町時代の井戸3基を検出した。すべての井戸で曲物を転用した水溜が確認でき、水溜上部に礫が設置されたものも存在する。当期の集落が、調査区周辺に展開していたことを窺わせる。（林　大智）

管玉、管玉未成品と緑色凝灰岩の原石

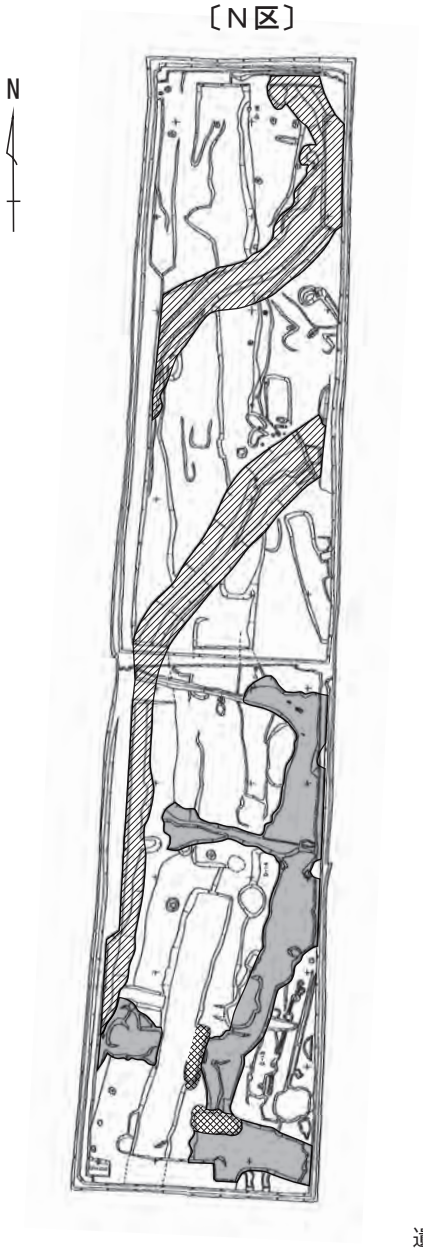
線刻のある砥石

室町時代の井戸（SK100）

平成 27(2015) 年度調査区



平成 11(1999) 年度
〔N区〕



遺構概略図（縮尺：1/400）

環濠 1・2 完掘状況（西から）

環濠 1 調査風景（東から）

環濠 1 土層堆積状況（西から）

SD62（環濠）土器状況（南から）

方形周溝墓 土器出土状況（南西から）

SK105（土坑墓）土器出土状況（南から）

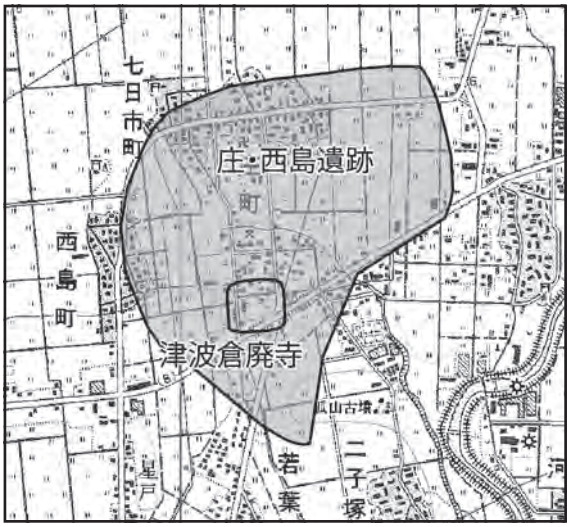
SK119（土坑）編物等出土状況（東から）

P223（柱穴）柱根検出状況（南から）

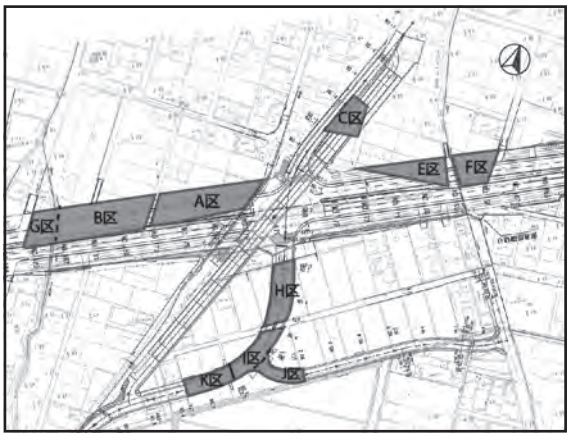
庄（しょう）・西島（にしじま）遺跡、津波倉（つばくら）廃寺（はいじ）

所 在 地　加賀市庄町・津波倉町地内　　調査期間　平成 27 年 5 月 22 日～同年 12 月 22 日

調査面積　5,800㎡　　調査担当　浜崎悟司　中森茂明　宮永正則　西田昌弘　横山純子　山場愛弓　関　晃史



遺跡位置図（S=1/25,000）



調査区割図（S=1/5,000）

調査成果の要点

- 古代を中心とする遺跡で、B 区では調査区全体に古代の掘立柱建物が広がる様子を確認した。
- 限られた範囲で複数の土坑が切り合う土坑群を確認した。
- 床面に壁溝をもつ弥生時代の土坑を確認した。
- 古代瓦の出土はあったが、古代寺院と考えられる遺構は確認できなかった。

庄・西島遺跡、津波倉廃寺は加賀市北部に広がる江沼平野のほぼ中央部に位置し、標高は 10m 前後を測る。庄・西島遺跡の推定範囲は庄町・津波倉町を中心に 6 つの町に広がる。その範囲の中心からやや南寄りの地点に津波倉廃寺の推定範囲があり、今回の調査範囲にも含まれている。調査は一般国道 8 号の加賀拡幅工事に伴うものであり、今回の調査では国道 8 号の両脇にあたる範囲が対象となった。

遺構としては古代の掘立柱建物・土坑（群）・井戸・溝、弥生時代から古墳時代にかけての建物跡・土坑、中世の用水路跡等が確認された。特に古代の掘立柱建物は B 区のほぼ全域に整然と並ぶようにして分布している。そのほとんどが南北方向に軸をもつ側柱建物であり、建物の規模は小～中規模のものが中心となっている。柱穴の掘方は隅丸方形を呈し、1 辺 40 ～ 60㎝を測る。3 × 6 間の南北棟建物が今回の調査範囲内で最大規模のものとなる。建物の主軸の方角から建物群の中には 2 つの時期が存在すると考えられるが、柱穴同士の切り合い例が非常に乏しかったため時期の新旧関係は判断が難しい状況である。

また、特徴的な遺構としては、限られた範囲の中で切り合う土坑群を検出した。これは A 区と B 区で確認されたものであるが、様相や規模は両地区の間で違いがある。A 区で確認されたものは、1 辺 4 ～ 5m と考えられる方形の土坑が溝のように連なりながら切り合っている。これに対し、B 区で確認されたものは長軸 1 ～ 2m を測る不定形の土坑が 4m × 4m 程の範囲内で重なり合う。出土遺物や土層観察から、両者とも土坑同士に大きな時期差はないものと考えられる。この土坑群がもつ性格については現段階では不明である。類例としては同じ加賀市内の篠原遺跡で確認された土坑が挙げられる。

その他の特筆すべき古代の遺構としては、長さ2m、幅20cm程の細溝が横向きで一定間隔に並ぶ「波板状凹凸面」がＢ地区の隣であるＧ区内で確認されている。その脇には幅1m、深さ30cm程の溝が走る。この「波板状凹凸面」は当時道路としての役割を果たしていた遺構である可能性が考えられる。

古代以外の遺構としては、弥生時代から古墳時代にかけての掘立柱建物跡、土坑がＦ区で確認された。特に注目されるのが壁に沿った細い溝を底面に持つ土坑２基である。土坑内からは月影式に比定される弥生時代終末期の土器が出土している。近接して確認した高床倉庫の柱筋と坑壁を揃えていることから、この土坑は貯蔵庫的役割を果たしていた可能性が考えられる。

国道８号より南側の調査区は北側の調査区に比べ全体的に遺構密度が薄く、全容が分かる遺構がほとんど検出されなかった。そのため、この範囲は遺跡の中心部からは外れた地点であると考えられる。

遺物は古代の須恵器・土師器を中心に、弥生土器、瓦、石製品、木製品等が出土している。瓦は凸面に格子状のタタキ目を、凹面に布目をもつ古代瓦である。白鳳期に比定される瓦とされ、いずれも平瓦・丸瓦の小片である。これらの古代瓦がまとまって出土する地点は確認できなかったため、瓦を葺いた建物は今回の調査範囲内には存在しないと考えられる。

本遺跡はかつてより古代瓦が散布する地域として知られていた。更に付近で和同開珎のまとまった出土が数件あったことや、地名伝承から古代寺院の存在が指摘されてきた。しかし、今回の調査では寺院跡と考えられる具体的な遺構は確認できなかった。散発的ではあるが、古代瓦片の出土は広い範囲で確認されたため、周辺に寺院ないしは役所などの瓦葺建物が存在した可能性は高いといえる。また、整然と並ぶ掘立柱建物群やその傍を通る「波板状凹凸面」の様子から、庄・西島遺跡はこの地域の中心的な集落であったといえるのではないだろうか。近年では津幡町加茂廃寺のように、整然とした伽藍配置を持たない一堂一宇的な「村落寺院」の存在も知られるようになってきた。今後は有力集落における「村堂」の可能性にも留意したい。　（浜崎悟司・山場愛弓）

調査区遠景（南西から）

Ｂ区全景（上が北）

波板状凹凸面（Ｇ区）

壁溝をもつ土坑（Ｆ区）

平成 27 年度下半期の出土品整理作業

国関係調査グループ

下半期は上半期より漆町遺跡を継続しトレース作業をおこなった。次に、金沢城跡（金沢市 平成 26 年度調査）、矢田新遺跡（小松市 平成 26 年度調査）、畝田 C 遺跡（金沢市　平成 23 年度調査）、畝田・無量寺遺跡（金沢市　平成 23 年度調査）の整理を行った。

金沢城跡では東ノ丸に存在した玉泉院丸以前の庭園遺構の遺物の整理を行った。出土遺物の多くは瓦であり、他に陶磁器類、土師皿、銅版、銅釘、鉛塊、石鉢、硯等を実測している。瓦では鬼瓦、陶磁器類では美濃焼の輪花皿 , 三彩の輪花鉢、織部の皿等があった。実測していないが、戸室石の景石や飛び石と思われる板状石材も出土している。

矢田新遺跡は、飛鳥時代、奈良・平安時代、室町・戦国時代の 3 時期に大別される集落遺跡である。飛鳥時代の遺物としては、須恵器、土師器、文様の施された石製の紡錘車に加え、土製の紡錘車も出土している。また、奈良・平安時代では、須恵器、土師器の他にフイゴの羽口等の鍛冶関連遺物が、室町・戦国時代では、土師器、陶磁器類、土錘に加え、石鉢や石臼、行火、五輪塔、砥石等の石製品が多く出土している。陶磁器類は種類も様々で、珠洲焼、越前焼、加賀焼等の中世陶器、中国産の青磁や染付け等があり、中世陶器は量も多かった。他に、打製石斧や、縄文土器も少量出土しており、長期にわたって営まれた遺跡だと感じられた。

畝田 C 遺跡は、弥生時代、奈良・平安時代の遺跡であるが、出土品は須恵器や内黒椀等の奈良・平安時代の遺物が多くを占める。他に陶磁器類が少量出土している。

畝田・無量寺遺跡では、弥生時代の甕、須恵器の坏・蓋、土錘が出土しているが、いずれも少量である。　（横山そのみ）

記名・分類・接合（金沢城跡）

横瓶の接合（矢田新遺跡）

石鉢の実測（矢田新遺跡）

県関係調査グループ

下半期は、北吉田ノシロタ遺跡（志賀町　平成26年度調査）、中カワナミマエダ遺跡（輪島市　平成25年度、平成26年度調査）、徳光聖興寺遺跡他1遺跡（白山市　平成26年度調査）、新庄カキノキダ遺跡（野々市市　平成26年度調査）の整理作業を行った。

北吉田ノシロタ遺跡では、平成26年度調査で出土した遺物の記名・分類・接合と実測・トレース作業を行った。前年度の整理作業のときも思ったことだが、ここの土器類は脆いものが多いため、接合しにくく、実測中に接着がとれてしまいうことがしばしばあった。また、前年度整理分との接合を見るために遺物整理箱を広げようとしたが、箱数が多いため場所の確保が難しく、床に台車を並べ壁際や机の下などの僅かな空きスペースを見つけては広げの繰り返しで、重労働な選別作業となった。

中カワナミマエダ遺跡では、記名・分類・接合、遺物の実測・トレース、遺構図トレース作業を行った。遺物は縄文土器が多く見うけられた。私は、形になるような縄文土器を見るのは初めてだったので、苦労や工夫を重ねて実測・トレースをしている様子を見て、勉強になった。

徳光聖興寺遺跡他1遺跡は、記名・分類・接合、遺物の実測・トレース、遺構図トレースを行った。遺物の数は少なかったが、陶磁器や加賀焼、珠洲焼、青磁の香炉、行火、漆器椀等がバラエティー豊かに出ており、実測も楽しめた。

新庄カキノキダ遺跡は、国関係調査グループ、特定事業調査グループと合同で整理作業を行った。箱数は1箱と少なかったが、遺物は縄文土器・須恵器・土師器・石製品などが多く出土していた。また、整理期間が4日間と非常に短かったため、テンポよく作業が進むように気を配った。

（澤山　彬）

下半期の洗浄は、北吉田ノシロタ遺跡（志賀町）、酒井バンドウマエ遺跡（羽咋市）、一針C遺跡（小松市）など、平成27年度出土品について実施した。

（松山和彦）

木器の実測（北吉田ノシロタ遺跡）

縄文土器の接合（中カワナミマエダ遺跡）

記名・分類・接合（徳光聖興寺遺跡）

特定事業調査グループ

下半期は、北吉田ノシロタ遺跡（羽咋郡志賀町　平成25年・26年度調査）、金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）（金沢市　平成27年度調査）、二日市イシバチ遺跡（野々市市・白山市　平成26年度調査）、福久遺跡（金沢市　平成24年・25年度調査）、新庄カキノキダ遺跡（野々市市　平成26年度調査）の整理を行った。

北吉田ノシロタ遺跡（平成25年・26年度調査）では、上半期より引き続き、出土品実測・トレース作業を行った。

金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区）では、今年度調査を行った出土品の記名・分類・接合、実測、トレースを行った。今年度調査では、越前の大甕（甕棺）が数多く出土していた。石蓋も数点あり、文字が刻んであるものもみられた。ミニチュア土器、土人形、銅銭、数珠玉など装飾品等も多くみられた。

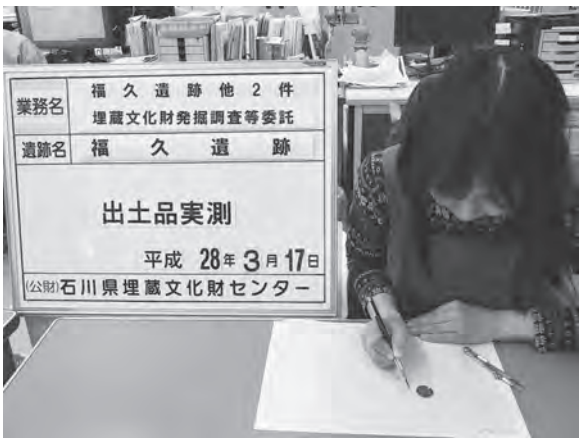
二日市イシバチ遺跡では、記名・分類・接合、実測、トレース、遺構図トレースを行った。よく似た口縁や体部片が多くなかなか大きくなるものが少なかったが、ほぼ完形になるものもあり、打製石斧等もみられた。

福久遺跡では、記名・分類・接合、実測、トレース、遺構図トレースを行った。遺物は須恵器が多く、墨書土器も数点あり、木製品では田下駄等もみられた。

新庄カキノキダ遺跡は、国関係調査グループと県関係調査グループと合同で整理作業を行った。

（土生久美子）

石蓋（金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区））



金属器の実測（福久遺跡）

越前甕の接合（金沢城下町遺跡（東兼六町5番地区））

土器の実測（二日市イシバチ遺跡）

弥生時代における土器の移動について
―胎土観察を中心に―

久田正弘

1　はじめに

筆者は、かつて砂粒観察により、加賀地方における古代土師器煮沸具の生産地域の推定と弥生時代の搬入土器の産地推定が可能（久田 2007）であることを明らかにした。今回は、昨年行われた『小松発・北陸新幹線ルートの弥生文化を探る』に係る小松市埋蔵文化財センターの資料調査、各地で行われた土器検討会などで実見した弥生土器などの観察結果を紹介し、考察を行いたい。

2　観察の方法

観察方法は土器を肉眼観察により、砂粒の一番多いものと次に多いものに注目し、石川県内の土器の混和材の特徴を類型化（久田 2007）した。石英基調と流紋岩基調に大きく分かれ、流紋岩は黒･赤･茶・灰・白色が主に確認されるが、1 か 2 の色調を多く含む土器が多いので、以下の胎土に分類した。

胎土Ａ－殆ど砂粒を含まないが、流紋岩基調と思われるもの。

胎土Ｂ－黒色流紋岩が主体、茶色や灰色が次に多く、粒子は丸く光沢あり。

胎土Ｃ－茶色流紋岩が主体、黒色や灰色が次に多く、粒子は丸く光沢あり。

胎土Ｄ－灰・白色流紋岩が主体、黒色や茶色が入り、粒子は丸く光沢あり。

胎土Ｅ－灰・白色流紋岩が主体、黒色や茶色が入り、粒子はゴツゴツして光沢なし。

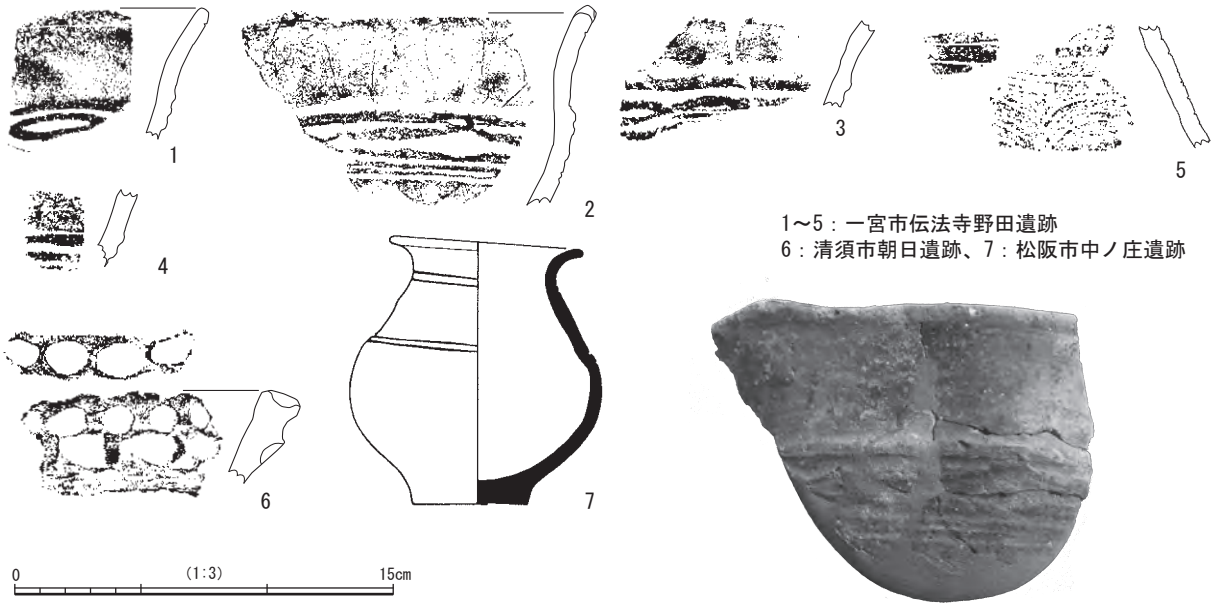
胎土Ｆ－流紋岩基調であるが、特徴となる砂礫を確認できなかったもの。

胎土Ｇ－石英・長石を主体とし、流紋岩も若干入るもの。

この分類に海綿骨針の有無や他の鉱物などを組み合わせれば、より細別可能である。しかし、細分することが目的ではなく、遺跡の特徴を明らかにすることで、遺跡外からの搬入土器を抽出することが目的である。胎土差以外にも、文様・調整・色調なども同時に検討する必要がある。土器の表面が剥離していないと観察が難しいことや、プレパラートを使用した分析ではないので、客観性は高くはない。混和材の写真は、ペンタックス WG-II の顕微鏡モード（1㎝接写）で撮影したものを 4.5％に縮小したもの（久田 2013）であり､誰でも安価に入手可能な機材で共通の写真撮影が出来る利点がある。写真 14 は、サイズが異なっており、接写モードで撮影したと思われる写真を 9％したものであろう。

3　東海地方の事例

第 1 図 1 ～ 5 は愛知県一宮市伝法寺野田遺跡（川添ほか 2007、蔭山ほか 2016）、6 は愛知県清須市朝日遺跡（宮腰ほか 2000）、7 は三重県松阪市中ノ庄遺跡（谷本 1972）出土である。1 ～ 4 は縄文時代晩期終末（弥生時代前期）の浮線文浅鉢（報告 E043・45・52・53、筆者改変）である。永草康次氏により、実体顕微鏡による土器表面の観察、偏光顕微鏡によるプレパラート観察が行われた（永草 2016）。1･2（E043･45）は海綿骨針･花崗岩･堆積岩類が見られ､尾張平野西部に普遍的に含まれるチャート・火山岩・輝石類が見られないとされ、口縁の形態差から同一個体では無いと判断された。4（E52）は表面観察では1･2によく類似し､数値化出来ないが同じ起源を持つ可能性が指摘されている｡筆者は、愛知県埋蔵文化財センターの永井宏幸氏から伝法寺野田遺跡で浮線文浅鉢に海綿骨針を持つものがあるとの連絡を受けて、蔭山誠一・永井宏幸氏のご厚意により報告書刊行前（2016 年 3 月 12 日）に資料観察（1 ～ 6）をする機会を得たが､実測図はミガキと文様の線が不明瞭なので､再度伺い実測を行っ



1～5：一宮市伝法寺野田遺跡
6：清須市朝日遺跡、7：松阪市中ノ庄遺跡

写真1　2の全景

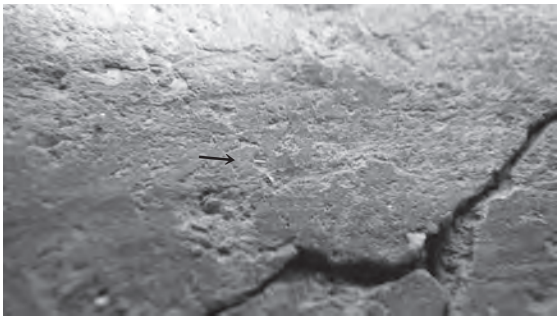


写真2　2の内面（海綿骨針）

写真3　3の内面（海綿骨針）

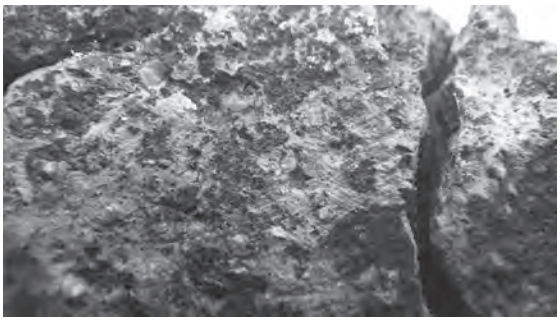


写真4　5の内面

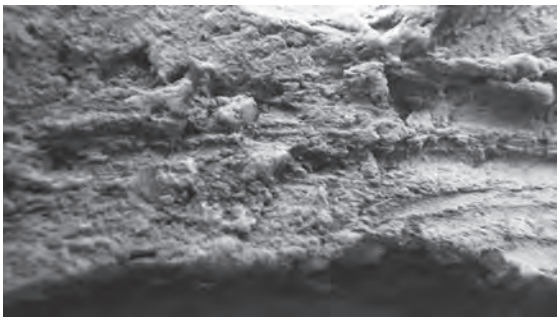


写真5　6の外面

写真6　7の全景

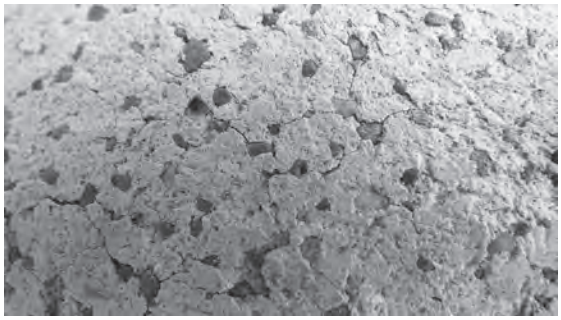


写真7　7の外面

第１図　東海地方の事例

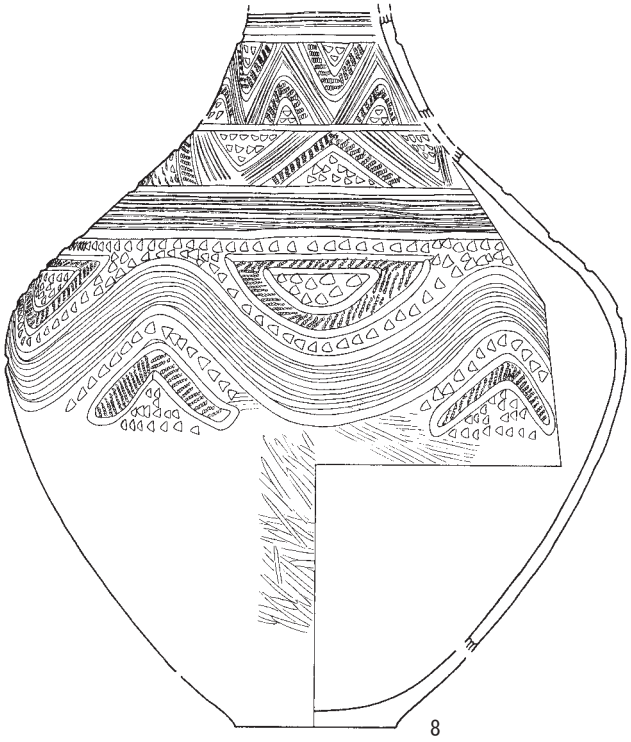
た。1 ～ 4 は浮線網状文を持つ浅鉢であるが、浮線文は太い工字文技法（写真 1）なので、氷・鳥屋系では無くて北陸系である。1･2 は質感と口縁部下側にヘラによる沈線文を持つので同一個体である。1・2 は胎土 G（長石主体）であり、他に 1 は灰色クズ粒子・シャーモット・暗赤色小粒子・金雲母を含み、2 は灰色粒子･金雲母･海綿骨針（写真 2）を含む。3･4 は同一個体であり、胎土 G（長石主体）である。肉眼観察で、3 は金雲母が多くシャーモットはやや多く、4 は金雲母があるとメモしたが、3･4 とも写真では海綿骨針（写真 3）を確認した。よって、1 ～ 4 は文様・胎土から同一個体の可能性がある。5（一部改変）は遺構検出時に貝田町式～高蔵式と出土した（川添ほか 2007）。二又状工具で上から下側に左回りに施文し、頸部に直線文、胴部上半には連弧文を 2 段、下半には横方向の沈線を持つ。胎土は石英（クリスタル・にごり）・長石・花崗岩・黒色・白色を少し含む（写真 4）。出土した高蔵式壺（川添ほか 2007 図 26-9）は、沈線は左回りに施文され、胎土は長石が多く、黒色は少し・白色（大粒）を含むので、5 は在地の土器と大きくは変わらない。二又状工具は、瓜郷式にも利用されるが、5 は東北地方南部の川原町口式壺の可能性を指摘（久田 2008）した。下半の沈線の類例を知らないのと胎土的には模倣土器と思われる。6 は愛知県センター職員が、朝日遺跡の条痕文壺（6）（宮腰ほか 2000）は北陸系ではないのかと聞いたことがあり、実見した。観察した結果、口縁部突帯の指頭刻みは北陸系の要素であるが、胎土は大粒の石英・長石が主体であり、粘土の質感の相違、外面の条痕は粗く深い（写真 5）ことからも、北陸系の模倣土器である。永井氏から連絡を受けた際に、1 ～ 4 と 6 の胎土比較を要望し、砂粒組成は尾張平野に共通するので在地で製作された模倣土器（永草 2016）とされた。

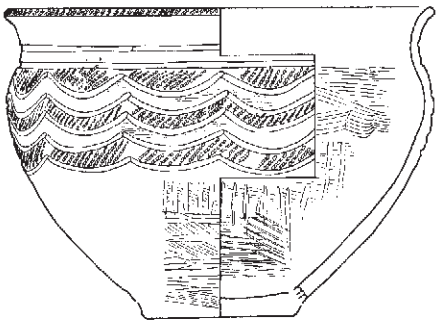
7 は松阪市中ノ庄遺跡の遠賀川式壺である。2014 年 9 月 27 日伊勢湾岸弥生時代研究会で、胎土 G が主体のなかに唯一胎土 C（石英・長石を少し含む、写真 6・7）を確認し、違いは谷本 1972 の白黒写真でも確認される。筆者は滋賀県北部の可能性を指摘し、石井智大氏も否定はされなかった。この胎土の遠賀川式壺は、松本市エリ穴遺跡（未報告資料）でも出土（久田 2001）している。

4　新潟県の事例

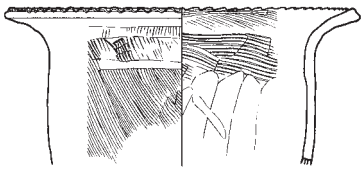
第 2・3 図 8 ～ 14 は新潟県上越市吹上遺跡出土であり、2015 年 2 月 6 日に下濱貴子・樫田誠・藤田慎一と観察した。小松系・栗林系土器は、文様・器形・混和材・色調などが明確に異なる。8 は栗林系壺であり、胎土（写真 8）には石英（クリスタル）・長石・白色粒子を多く含み、在地で製作されたものではない。9 は、器形・文様などは栗林系鉢であるが、胎土 D（写真 9、小松系胎土）なので栗林系の人が吹上遺跡で製作した土器となろう。10・11 は SK106（Ⅰ期古段階、笹澤ほか 2006）出土の小松系甕である。10 は胎土 G であり、大粒の長石・灰色、丸くて小粒の黒色、海綿骨針を含む（写真 10）ので能登地方からの搬入土器である。11 は、灰・白色は微細で少ない（写真 11）。12 は SK602 出土であり、灰色主体で砂粒は少ない（写真 12）。11・12 は砂粒が少ないので確定は出来ないが、胎土 D と思われ、手取川流域と富山県内に類例がある。藤田慎一氏は富山県内西部（射水市周辺）の可能性が高いと指摘された。下濱氏は「これらの搬入された土器は、やや白色が強く、在地系はやや黄色が強い傾向がある」と発言され、観察者は同調した。13 は西日本系壺（瀬戸内～山陰系）であり、文様的には鳥取以西からの搬入とされた（笹澤ほか 2006）が、胎土・色調（写真 13）は在地なので模倣土器と思われる。14 は西日本系壺（瀬戸内系､野村ほか 2010）であり､砂粒は確認しにくかったが石英・黒色（写真 14）が目立つので搬入土器と思われる。

15 は 2015 年 8 月 7・8 日に行われた新潟市江南区（旧亀田町）西郷遺跡（土橋ほか 2009）の土器検討会で観察した。丸くて大粒な砂粒であり、茶色が多くて灰・黒色を含む（写真 15）ので胎土 C





0 (1:4) 15cm



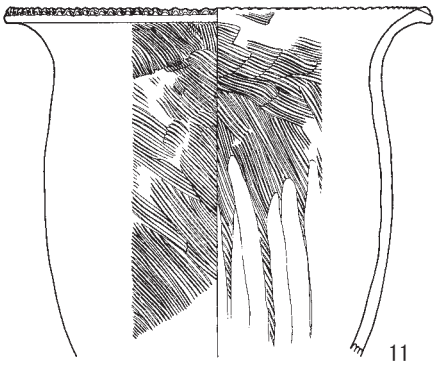


写真8　8の内面

8～12：上越市吹上遺跡
（8・9：栗林系土器、10・11：小松系土器）

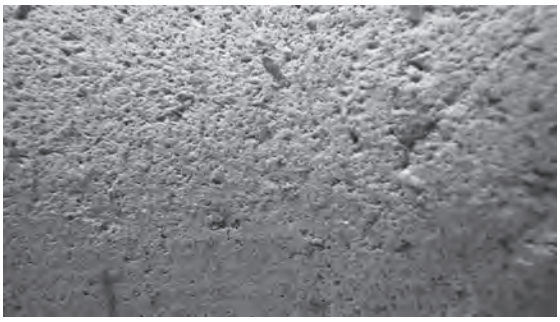


写真9　9の内面

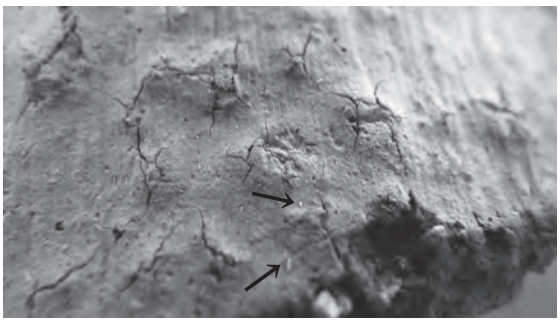
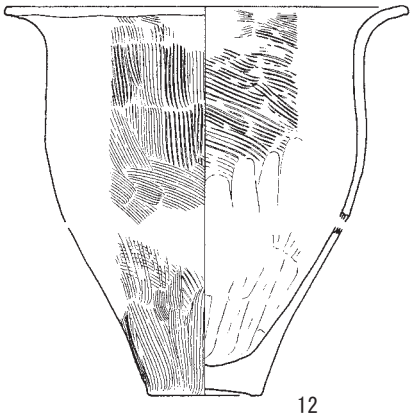


写真10　10の内面（海綿骨針）

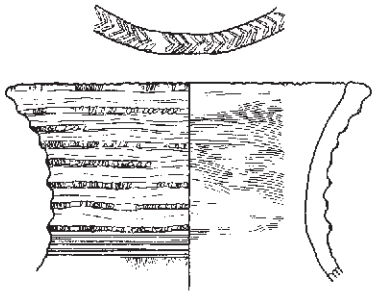
写真11　11の内面

第２図　新潟県内の事例１



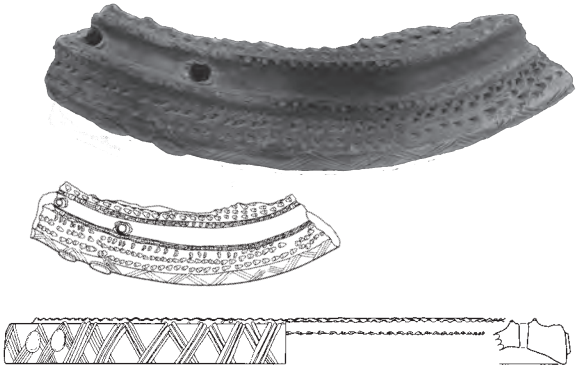
12

写真12　12の内面



13

写真13　13の外面



14

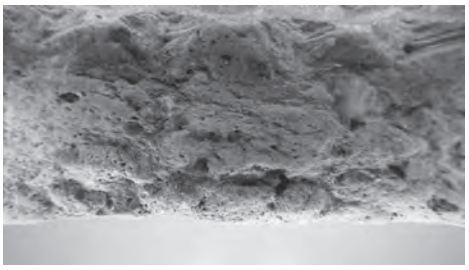
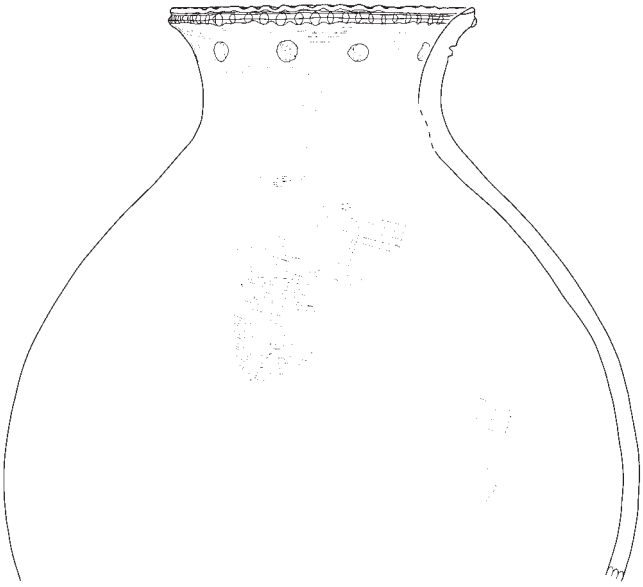


写真14　14の断面

0　(1:4)　15cm



15

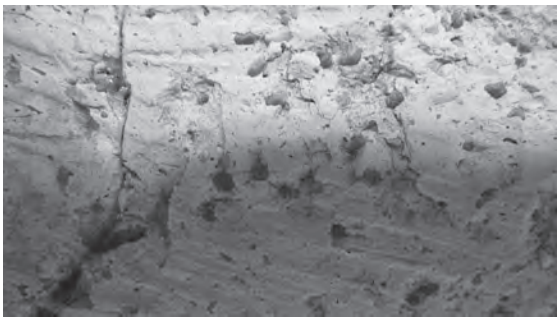


写真15　15の内面

12～14：上越市吹上遺跡
15：新潟市西郷遺跡

第３図　新潟県内の事例２

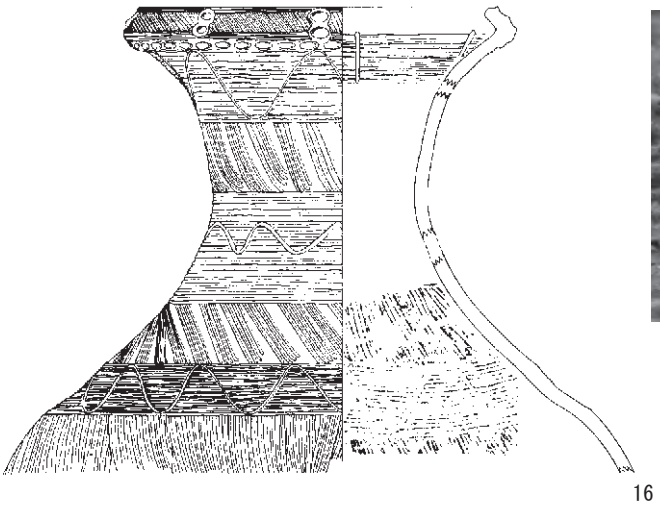
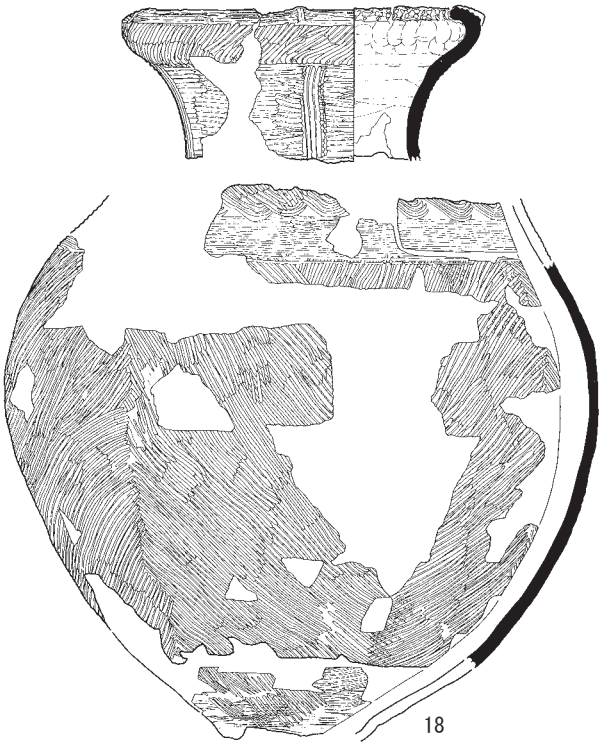


写真16　16の外面



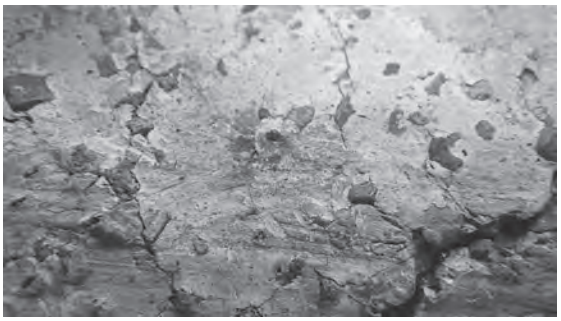
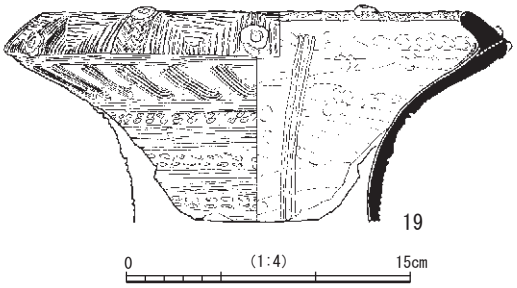


写真17　18の内面



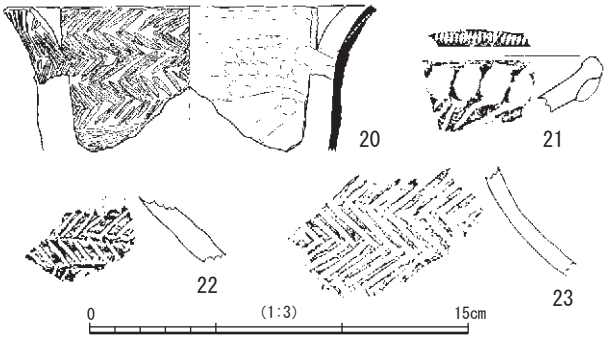
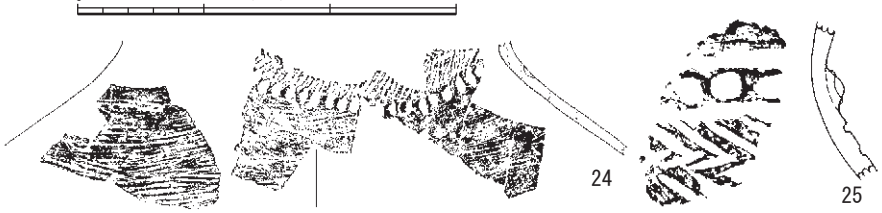


写真18　19の内面



16・17：新潟市緒立遺跡
18～20：小松市八日市地方遺跡
21～24：志賀町山王丸山遺跡
25：金沢市矢木ジワリ遺跡
16～20・24：1/4
21～23・25：1/3

第４図　新潟県内の事例３

である。在地の東北・北陸系土器は胎土Ｇ（海綿骨針を含むものもあり）だが、16 は観察表では「赤色の粗砂を含む」とされ整理関係者も在地の土器との差を認識している。また、報告番号 550・567・577 は、下濱貴子氏により八日市地方７期以前と発言された土器である。577 は写真撮影を行わなかったが、黒色主体で灰色を含み、長石・角閃石は微量含むので胎土Ｂ（搬入土器）の可能性がある。

16･17 は新潟市西区（旧黒埼町）緒立遺跡出土であり、共に東海地方西部系（渡邊ほか 1983）から、16 は矢木ジワリ遺跡（増山 1987）との類似から北陸地方西部系と訂正（渡邊 1998）された。16 は下濱貴子氏が以前見た際に八日市地方遺跡の土器と文様・胎土も変わらないと判断され、筆者が 2014 年「緒立遺跡展」の展示を見に行くのなら確認してきて欲しいと言われた。7 月 12 日新潟市埋蔵文化財センターの展示ケース越しに見学し、詳細な観察は行っていないが、大粒で丸い灰色主体（写真 16・西郷遺跡検討会で撮影）なので、胎土Ｄに近いと思われる。小松市八日市地方遺跡 18・19（福海ほか 2003、八日市地方５期）は大粒で丸い粒子を持つ流紋岩基調（写真 17・18、胎土Ｂ）であり、16 は胎土的には八日市地方遺跡の土器と差は少なく、間延びした跳上文は 19 と同じであり、近い関係が伺える。下濱氏からは八日市地方遺跡の条痕文壺は二つと同じものが無いので、文様が違うから八日市地方遺跡の土器では無いと否定しなくても良いと教示を得た。17 は大粒の長石が主体（胎土Ｇ）であり、在地とはあまり差がない。口縁部突帯には指頭による刻み、頸部にはヘラ描き横羽状文をもつが、両文様ともは新潟県内では以降に続かない。ヘラ描き綾杉文は、八日市地方遺跡は甕（20 など）が見られるが、指頭圧痕を持つ突帯とヘラ描き綾杉文の条痕文系土器は報告にはない（福海ほか 2003・下濱ほか 2016）。指頭圧痕を持つ突帯とヘラ描き綾杉文の条痕文系壺は金沢市矢木ジワリ遺跡の壺（25 増山 1987）や志賀町（旧富来町）山王丸山遺跡の壺（21 ～ 24 的場ほか 1994）に見られ、能登地方では口縁部突帯への指頭刻みが多いことや胎土Ｇが主体であるので、17 は能登地方からの搬入土器と思われる。

5　山口県・関東地方の事例

26 ～ 29 は山口県下関市（旧豊浦町）沖田遺跡（古庄 2000）出土の浅鉢であり、26 は東日本系浅鉢（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 2001）で、日本海ルートで持ち込まれた大洞Ａ式浅鉢指摘（塚本 2011）されている。26（筆者実測）は屈曲を持つ浅鉢であり、屈曲部中央をやや厚くし、上から見れば方形と思われる（写真 19）。内外面はヨコミガキ調整であるが、外面はやや剥離（磨滅）する。体部には２本の沈線を２か所に持ち、間の無文帯はヨコミガキで窪ませている。上側の２本の沈線は連結していない。1㎜大の長石・石英が主体であり、白色の微粒子が少し（写真 20）みられる。27 ～ 29 は屈曲を持ち、波頂を持つ浅鉢であるが、色調は各々異なる（写真 19）。胎土は白色の微粒子は目立たないが石英・長石主体なので大きく変わらない（写真 21 ～ 23）。文様的には、眼鏡状突帯を意識しているが、器形・胎土的には突帯文系浅鉢類と差が認めにくいので、大洞系浅鉢を模倣したものであろう。

30 は東京都文京区小石川遺跡出土で、色調は暗灰色で胎土には砂粒・石英・雲母を多く含み、東海地方から搬入されたもの（加藤 1994）とされた。1996 年金沢で行われた「古代の木製食器」際に会場で実見した。砂粒のイメージは記憶にないが、多量の銀色鉱物のみ記憶がある。直線文と小振りの波状文を多段に配置し最下段に斜行単線文を２段持つので八日市地方７期でも後半になろう。砂粒とされたものは、石英以外なので、胎土は流紋岩基調と想定されよう。この多量の雲母は、松阪市（旧嬉野町）赤部遺跡の北陸系装飾器台（寺嶋ほか 2007）に確認した。この土器は、寺嶋昭洋氏が 32 ～ 35 の類例を野々市町御経塚ツカダ遺跡の装飾器台（31）（吉田 1984）を見つけた。野々市に資料調査

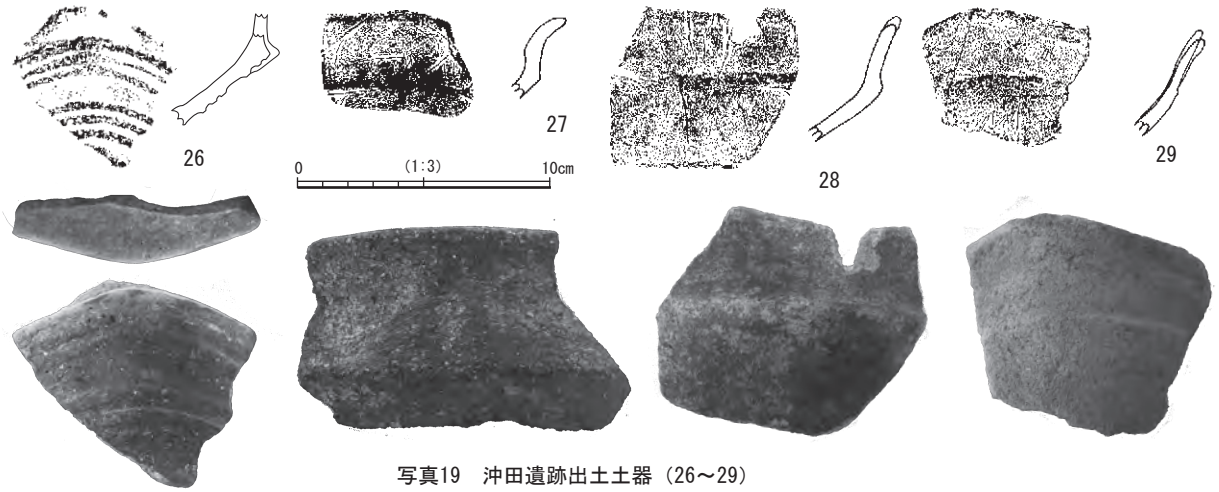


写真19　沖田遺跡出土土器（26～29）

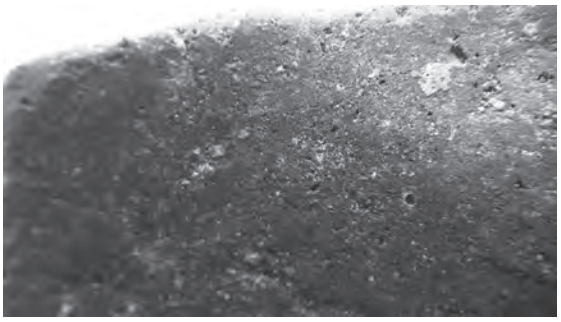


写真20　26の内面

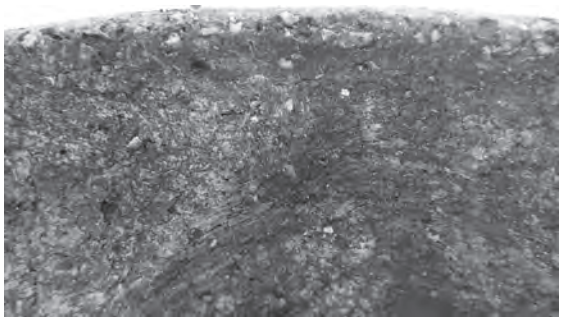


写真21　27の内面

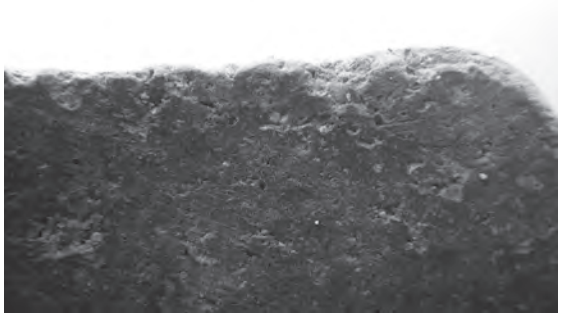
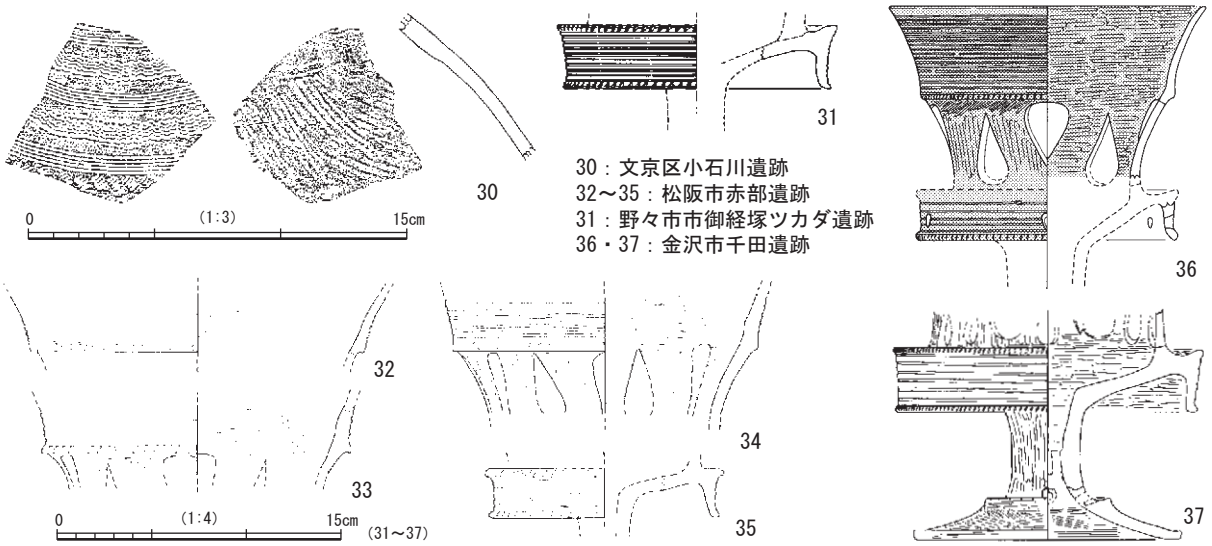


写真22　28の内面

写真23　29の内面

第５図　山口県下関市沖田遺跡の事例



第６図　東京都文京区小石川遺跡の事例と関連資料

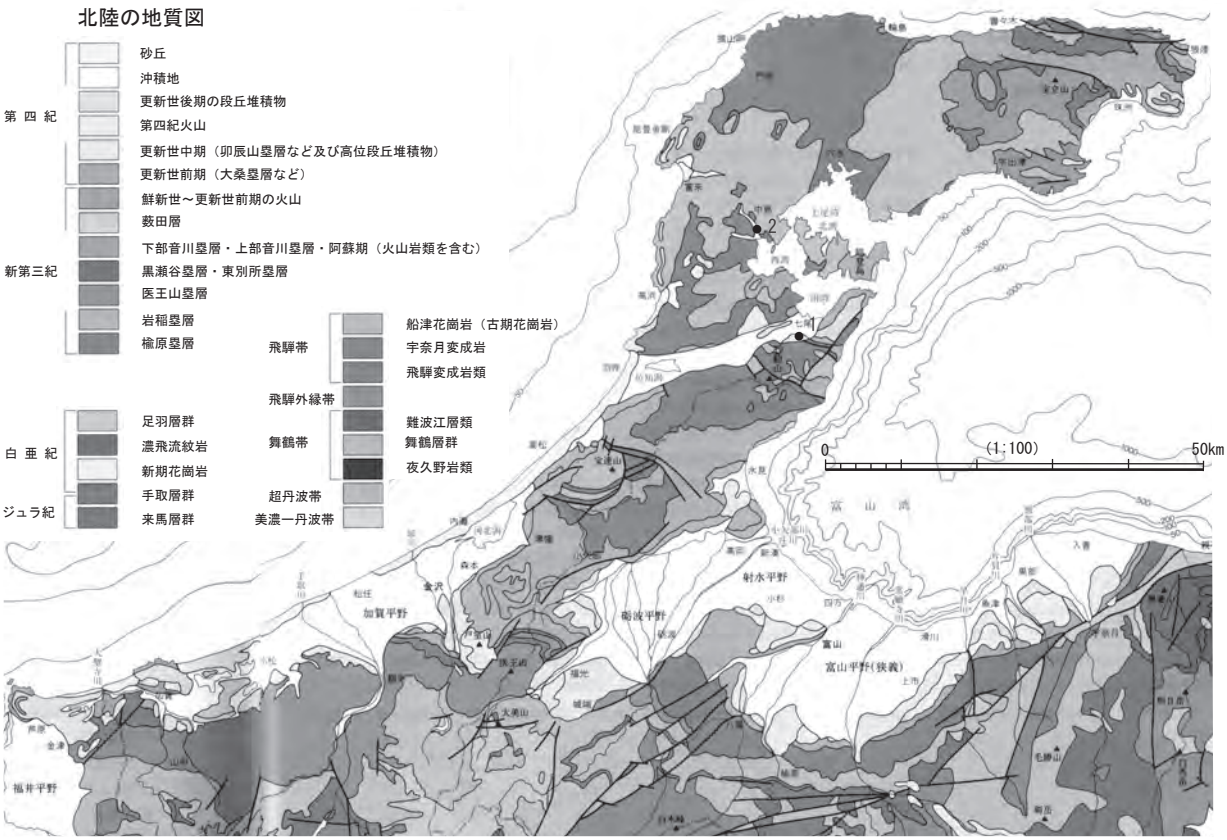
を行う際に筆者も実見する機会を得た。刻み文様を持つ装飾器台の例や石川県内で銀雲母を多量に含む土器の類例を知らなかったので、東海地方西部で模倣されたものではないかと発言した。赤部遺跡（寺嶋ほか 2007）では、北陸系装飾器台は 7 点あり、観察表では 32（雲母片多い）、33（雲母微粒子含む）とされるので筆者の記憶にある土器は 32 と思われる。その後、金沢市中屋サワ遺跡（谷口ほか 2010）の縄文土器検討会で多量の銀雲母を含む縄文土器を数点、金沢城下町遺跡丸の内 7 番地点（安中ほか 2014）の整理中に近世土師皿 1 点を確認し、筆者の未熟さを痛感した。また、刻みを持つ装飾器台も、白山市二日市イチバチ遺跡（当センター今年度整理）や金沢市千田遺跡（36・37）（小西 2002）も確認した。よって、32 は北加賀地方で製作された可能性が高い。

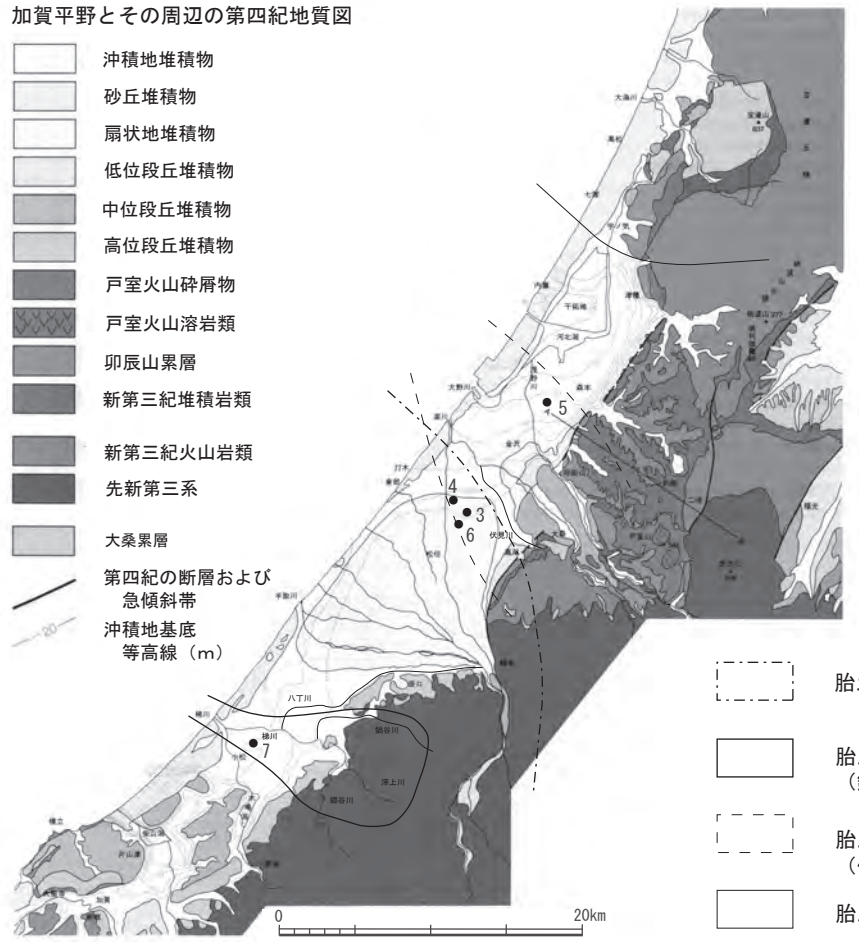
6　考察

1 ～ 4 は、胎土 G と海綿骨針から能登地方に製作地を求められ、能登地方で金雲母が多い土器の類例をみてみたい。発掘調査例は少ないが、七尾市の報告書に金雲母の記載が見られる。七尾城跡シッケ地区遺跡（第 7 図 1）では、中世土師器皿は a 類（橙色系で金雲母を多く含み海綿骨針を少量）と b 類（灰白色系で金雲母は僅に含み海綿骨針は多量）に分類されている（善端ほか 1992）。また、七尾市中島町定林寺前遺跡（第 7 図 2）では中世土師器皿の 33％には金雲母と海綿骨針が含まれる（下村 1998）。また、七尾市万行遺跡にも、大粒の金雲母が目立つ弥生土器などを確認した。よって、七尾市周辺で製作された浅鉢が弥生時代前期前半（浮線文 3 段階）に愛知県一宮市伝法寺野田遺跡まで運ばれたようである。これは、東海地方西部では海綿骨針を含む土器が、大洞 C1 式期：はいづめ遺跡（深鉢）、大洞 C2 式後半～ A 式前半（突帯文 2 期）：馬見塚遺跡 F 地点（浅鉢）で出土（久田 1998）しており、これは北陸地方西部と東海地方西部の直接的地域間交流の結果である。中国地方では、大洞 C2 式後半～ A 式前半の岡山県津島岡大遺跡浅鉢（石川 1995）は模倣土器（久田 1998）、山口県の 26 も模倣土器なのは、北陸地方以東との直接交流が少ない結果であろう。26 は方形浅鉢なので、突帯文 2a 期の可能性も考えておきたい。突帯文 2 期以前にも岡山県鏡野町久田堀ノ内遺跡（弘田ほか 2005）や島根県出雲市三田谷 I 遺跡（岡田ほか 2000）で八日市新保Ⅱ式土器、岡山県岡山市島岡大遺跡では後期中葉に東海・北陸の影響を受けた土器（阿部ほか 1994）が出土している。

16 は手取川流域（胎土 B ～ D）で製作された壺であり、時期は八日市地方 5 期（福海ほか 2003）である。17 は能登地方で製作された壺と思われ、能登Ⅱ期後半（久田 1999）である。これらの土器がⅡ期後半に石川県内から新潟市に搬入されている。上越市吹上遺跡では I 期古段階（八日市地方 7 期後半）に能登地方（10）と富山県西部か手取川流域（11・12）から土器が搬入されている。また、西日本系壺（14）は黒色砂粒が目立つことから、西川津遺跡などの砂粒と関連が想定され、出雲地方からの搬入の可能性を指摘しておきたい。新潟市西郷遺跡では、八日市地方 7 期以前と 8 期に手取川流域から土器（15）（西郷遺跡報告№ 577）が搬入されている。これは、「八日市地方遺跡での弥生文化の開化と繁栄であり、そこから北へとフロンティアを目指した人たち」（笹澤 2015）や能登・越中の人たちが持ち込んだ櫛描文系土器であり、同時に石器なども持ち込んでいる（久田 2009）。しかし、新潟県内に櫛描文系弥生土器が定着する以前、Ⅱ期後半（緒立 2 期）に条痕文系壺が南加賀・能登から持ち込まれたことが確認され、今後Ⅱ期後半の櫛描文系土器の出土も確認されよう。

関東へは、八日市地方 7･8 期に東京都文京区小石川遺跡に北加賀の土器が搬入された。埼玉県池守･池上遺跡周辺では小松系土器が多く出土し、在地の土器と胎土差が無い（中島ほか 1984）ので、小松系小集団の移動・土器製作（久田 1999）を想定した。2015 年 10 月 31 日埼玉弥生土器観会でも小松系土器は、在地系土器とは砂粒の差は感じなかった。しかし、南御山 2 式の搬入壺（中島 1984）は、





（クボタ1992を一部改変）

1：七尾市七尾城跡シッケ地区遺跡
2：七尾市中島町定林寺前遺跡
3：野々市市御経塚ツカダ遺跡
4：金沢市中屋サワ遺跡
5：金沢市千田遺跡
6：野々市市二日市イチバチ遺跡

（クボタ1992・久田2007
を一部改変・合成）

胎土D土器製作地想定範囲（手取川流域）

胎土B・C土器製作地想定範囲
（鍋谷川・梯川流域）

胎土E土器製作地想定範囲
（伏見川・犀川・浅野川流域）

胎土G土器製作地想定範囲（高松以北）

第７図　地質と土器の混和材の関係

<table>
<tr><th>山口</th><th colspan="2">備前・備中</th><th>河　内</th><th>大　和</th><th colspan="2">尾　張</th><th colspan="2">南加賀</th><th colspan="2">北加賀</th><th colspan="2">能　登</th><th colspan="2">新　潟</th><th colspan="2">北　信</th><th colspan="2">関東以東</th></tr>
<tr><td rowspan="3">26
模倣</td><td rowspan="2">津島
岡大</td><td rowspan="2">下野
模倣</td><td colspan="2">口酒井</td><td colspan="2" rowspan="2">五貫森</td><td rowspan="2">能登・
北加賀</td><td colspan="6">下野後半</td><td colspan="2">上野原</td><td colspan="2">佐野Ⅱ後半</td><td colspan="2">大洞C2後半</td></tr>
<tr><td colspan="2">船　橋</td><td colspan="6">長竹前半</td><td colspan="2">鳥屋1</td><td colspan="2">女鳥羽川</td><td colspan="2">大洞A前半</td></tr>
<tr><td colspan="2">沢　田</td><td colspan="2">長　原</td><td colspan="2">馬見塚</td><td colspan="4">長竹後半</td><td colspan="2">北方池の下</td><td colspan="2">鳥屋2a</td><td colspan="2">離山・氷Ⅰ古</td><td colspan="2">大洞A後半</td></tr>
<tr><td colspan="2">Ⅰ-1</td><td>Ⅰ-1</td><td>Ⅰ-1</td><td>Ⅰ-1</td><td>1～4
能登</td><td colspan="2">八日市1</td><td>八田中
落ち込み</td><td>Ⅰ前半</td><td>小島六十苅</td><td colspan="2">鳥屋2b</td><td colspan="2">氷Ⅰ中新</td><td colspan="2">大洞A’</td></tr>
<tr><td colspan="2">Ⅰ-2</td><td>Ⅰ-2</td><td rowspan="2">Ⅰ-2</td><td>Ⅰ-2</td><td></td><td colspan="2"></td><td></td><td></td><td></td><td colspan="2"></td><td colspan="2"></td><td colspan="2"></td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">Ⅰ-3</td><td>Ⅰ-3</td><td>Ⅰ-3</td><td colspan="2">八日市2</td><td rowspan="2">八田中
河道</td><td>Ⅰ後半</td><td rowspan="2">次場N-2</td><td colspan="2">緒立1期</td><td colspan="2">氷　Ⅱ</td><td colspan="2" rowspan="6"></td></tr>
<tr><td>Ⅰ-4</td><td>Ⅱ-1a</td><td>Ⅰ-4</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">中期Ⅰ-1</td><td>Ⅱ-1</td><td>Ⅱ-1b</td><td>Ⅱ-1</td><td>6
模倣</td><td>八日市3</td><td>Ⅱ前半</td><td colspan="2" rowspan="2">緒立2期</td><td colspan="2"></td><td colspan="2" rowspan="2">新諏訪
町</td></tr>
<tr><td colspan="2">中期1-2</td><td>Ⅱ-2</td><td>Ⅱ-2</td><td colspan="2">Ⅱ-2</td><td>八日市4</td><td rowspan="2">矢木
ジワリ</td><td>Ⅱ後半</td><td>山王丸山</td><td>17能登</td><td rowspan="4">西郷
577
加賀</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">中期1-3</td><td rowspan="2">Ⅱ-3</td><td rowspan="2">Ⅱ-3</td><td colspan="2">Ⅱ-3</td><td>八日市5</td><td>16加賀</td></tr>
<tr><td colspan="2">Ⅲ-1</td><td>八日市6</td><td>下安原
SD101</td><td>Ⅲa</td><td rowspan="2">次場V5</td><td></td><td>来見原（能登）</td><td>境窪
松節</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">中期Ⅱ-1</td><td rowspan="2">Ⅲ-1</td><td rowspan="2">Ⅲ-1</td><td colspan="2">Ⅲ-2</td><td rowspan="2">八日市7</td><td rowspan="2">寺中2・3
周溝建物</td><td rowspan="2">Ⅲb</td><td>吹上Ⅰ-1</td><td>10能登
11・12加賀・越中
14出雲？</td><td rowspan="4">栗林1</td><td rowspan="2">池上（古）</td><td rowspan="2">30
北加賀</td></tr>
<tr><td colspan="2">Ⅲ-3</td><td rowspan="3">八日市8</td><td rowspan="3">野本2次
SI01</td><td rowspan="3">Ⅲc</td><td rowspan="3">次場Ⅰ-4</td><td colspan="2" rowspan="2">吹上Ⅰ-2</td><td rowspan="2">15加賀</td></tr>
<tr><td colspan="2">中期Ⅱ-2</td><td rowspan="2">Ⅲ-2</td><td rowspan="2">Ⅲ-2</td><td colspan="2">Ⅲ-4</td><td rowspan="2">池上（新）</td><td rowspan="2">南御
山2
模倣</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">中期Ⅱ-3</td><td colspan="2">Ⅲ-5</td></tr>
<tr><td colspan="2">Ⅳ-1</td><td>Ⅲ-3</td><td colspan="2">Ⅳ-1</td><td>八日市9</td><td>磯　部</td><td>Ⅳa</td><td>細口源
田山</td><td colspan="2">吹上Ⅰ-3</td><td colspan="2">栗林2（古）</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td colspan="2"></td><td>Ⅳ-2</td><td>Ⅲ-4</td><td colspan="2">Ⅳ-2</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td colspan="2"></td><td colspan="2"></td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td colspan="2">中期Ⅱ-4
中期Ⅲ-1</td><td rowspan="2">Ⅳ-3</td><td rowspan="3">Ⅳ</td><td>Ⅳ-3</td><td rowspan="2">5
川原
町口
模倣</td><td>八日市10</td><td>専光寺</td><td>Ⅳb</td><td rowspan="2">東的場
杉　谷</td><td colspan="2">吹上Ⅱ（古）</td><td colspan="2">栗林2（新）</td><td colspan="2">北　島</td></tr>
<tr><td colspan="2">中期Ⅲ-2</td><td>Ⅳ-4</td><td></td><td>戸水B</td><td>Ⅳc</td><td colspan="2">吹上Ⅱ（新）</td><td colspan="2">栗林3</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td colspan="2">中期Ⅲ-3</td><td>Ⅳ-4</td><td>Ⅳ-5</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
</table>

表１　各地の併行関係

下濱ほか2016を修正・加筆

胎土差を筆者も認識したが、今回の観察では微量の銀雲母を確認し、石英（クリスタル）がなかった。当日模倣土器では無いのかと発言し、植木雅博氏も南東北地方の土器の胎土とは違う可能性を指摘された。また、池上遺跡の在地系壺には胎土差があるので、今後胎土分類を行えば製作地が異なる土器を抽出出来る可能性を地元の課題として指摘しておく。近年群馬県内では、前橋市新田上遺跡（八日市地方８期、長澤ほか 2015）や安中市でも小松式土器（八日市地方７～８期）が搬入されている。これは栗林式土器の流入と関連しているようであり、栗林式土器と異なる器形・調整・文様・胎土差を認識することで小松式土器の搬入・模倣土器を認識・抽出できるので、今後資料の増加を期待したい。

7　おわりに

北陸地方では、2000 年以降に弥生時代中期遺跡の調査や報告書刊行が多く行われ、土器観察会などに参加する機会を多く得た。その結果、在地の土器では胎土分類で数種類が確認されることが多く、異系統搬入土器は文様・胎土も異なることが判ってきた。よって胎土差が認識出来るような砂粒の記載を行うことで、地域の特性や搬入土器の抽出に役立つことであろう。本稿をまとめるにあたり、多くの方々の協力を得たが、筆者の誤認などから協力者の意見を反映していない点もあるが氏名を記して謝意としたい。石井智大、石川日出志、井上慎也、植木雅博、大藪由美子、沖田絵麻、蔭山誠一、樫田　誠、川部浩司、小島幸雄、笹澤正史、下濱貴子、寺嶋昭洋、永井宏幸、長澤典子、羽深忠司、水田雅美、藤田慎一、松井広信、安中哲徳、吉田　念、渡邉朋和、渡邉裕之（敬称省略）。

参考文献

阿部芳郎ほか　1994 『津島岡大遺跡 4』岡山大学埋蔵文化財調査センター
石川日出志　1995 「工字文から流水文へ」『みずほ第 15 号』大和弥生文化の会
岡田憲一ほか　2000 『三田谷Ⅰ遺跡　Vol.3』島根県教育委員会
加藤元信　1994 『小石川遺跡』文京区遺跡調査会
蔭山誠一ほか　2016 『伝法寺野田遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター
川添和暁ほか　2007 『伝法寺野田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
クボタ　1992 『アーバンクボタ 31　特集　北陸の丘陵と平野』
小西昌志　2002 『千田遺跡』金沢市埋蔵文化財センター
小松市教育委員会　2015 『小松発・北陸新幹線ルートの弥生文化を探る』
笹澤正史ほか　2006 『吹上遺跡』 2007『吹上遺跡範囲確認調査報告書』上越市教育委員会
笹澤正史　2015 「海の道、山の道、玉の道」『小松発・北陸新幹線ルートの弥生文化を探る』小松市教育委員会
下濱貴子ほか　2016 『八日市地方遺跡Ⅱ』小松市教育委員会
下村好美　1998 「定林寺前遺跡第 1 次調査区出土の中世土師器について」『定林寺前遺跡』中島町教育委員会
善端　直ほか　1992 『七尾城跡シッケ地区遺跡』七尾市教育委員会
谷口宗治ほか　2010 『中屋サワ遺跡Ⅴ』金沢市埋蔵文化財センター
谷本鋭次　1972 『中ノ庄遺跡』三重県教育委員会
塚本浩司ほか　2011 『弥生文化のはじまり－土居ヶ浜遺跡と響灘周辺』大阪府立弥生文化博物館
土橋由理子ほか　2009 『西郷遺跡・大蔵遺跡』新潟県埋蔵文化財調査事業団
寺嶋昭洋ほか　2007 『赤部遺跡』松坂市教育委員会
土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム　2001 『角島と土井ヶ浜＝その歴史とルーツ』
長澤典子ほか　2015 『新田上遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
中島　宏ほか　1984 『池守・池上』埼玉県教育委員会
永草康次　2016 「愛知県一宮市伝法寺野田遺跡出土土器（主に浮線紋鉢）の胎土に関する報告」『伝法寺野田遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター
新潟市埋蔵文化財センター　2014 「緒立遺跡展」
野村忠司ほか　2011 『吹上遺跡Ⅱ』上越市教育委員会
久田正弘　1998 「北陸地方西部の土器の動き」『氷遺跡発掘調査資料図譜』氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会
久田正弘　1999 「弥生時代中期の北陸と長野の関係」『長野県考古学会誌第 92 号』長野県考古学会
久田正弘　2001 「北陸地方の木目沈線文と遠賀川式土器について」『石川県埋蔵文化財情報第 6 号』石川県埋蔵文化財センター
久田正弘　2007 「混和材からみた土器の移動について 1」『石川県埋蔵文化財情報第 17 号』石川県埋蔵文化財センター
久田正弘　2008 「北陸地方の農耕社会の形成」『弥生のムラの風景』石川県立歴史博物館
久田正弘　2009 「弥生時代の東日本系土器集成―栗林式土器･天王山式土器を中心に」『石川考古学研究会々誌第 52 号』石川考古学研究会
久田正弘　2012 「石川県を中心とした縄文時代晩期中葉から後葉の土器編年について」『石川考古学研究会々誌第55号』石川考古学研究会
久田正弘 2013 「西日本への浮線文土器と舟形土器・容器の波及」『石川県埋蔵文化財情報第 30 号』石川県埋蔵文化財センター
弘田和司ほか　2005 『久田堀ノ内遺跡』岡山県教育委員会
福海貴子ほか　2003 『八日市地方遺跡Ⅰ』小松市教育委員会
古庄浩明　2000 『角島・沖田遺跡』土井ヶ浜人類学ミュージアム
増山　仁　1987 『矢木ジワリ遺跡・矢木ヒガシウラ遺跡』金沢市教育委員会
的場勝俊ほか　1994 『山王丸山遺跡』富来町教育委員会
宮腰健司ほか　2000 『朝日遺跡Ⅵ』愛知県埋蔵文化財センター
安中哲徳ほか　2014 『金沢城下町遺跡（丸の内 7 番地点）Ⅰ』石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター
吉田　淳　1984 『御経塚ツカダ遺跡Ⅰ』野々市町教育委員会
渡邊朋和ほか　1983 『緒立遺跡』黒埼町教育委員会
渡邊朋和　1998 「緒立Ｂ遺跡出土弥生土器の編年的位置」『黒埼町史　資料編 1　原始・古代・中世』黒埼町

石川県埋蔵文化財情報
第 35 号

発行日　2016（平成28）年10月28日

発行　公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477　FAX 076-229-3731

URL　http://www.ishikawa-maibun.or.jp/
E-mail address　mail@ishikawa-maibun.or.jp

印　刷　鵜川印刷株式会社

©（公財）石川県埋蔵文化財センター